

# Conservation and Research of Early Buddhist Wall Paintings from the Fayaztepa Site, Southern Uzbekistan

E. Kageyama, H. Ishimatsu and Y. Yoshida

## ウズベキスタン南部 ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の 保存修復と研究 2

影山悦子 石松日奈子 吉田 豊

2022年

JSPS科研費 JP20K00185 成果報告書



# Conservation and Research of Early Buddhist Wall Paintings from the Fayaztepa Site, Southern Uzbekistan

E. Kageyama, H. Ishimatsu and Y. Yoshida

## ウズベキスタン南部 ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の 保存修復と研究 2

影山悦子 石松日奈子 吉田 豊

2022年

JSPS科研費 JP20K00185 成果報告書



## 例言

1. 本書は科学研究費補助金の交付を受けて行った研究の成果報告書である。
  - ・研究種目・課題番号：基盤研究(C) JSPS 科研費 JP20K00185
  - 課題名：新出資料によるウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画の再検討
  - 研究代表者：影山悦子（名古屋大学）
  - 研究協力者：石松日奈子（東京国立博物館）  
吉田豊（帝京大学文化財研究所）  
岩井俊平（龍谷大学）  
K. Abdullaev（イスタンブール大学）
  - 研究経費（予定）：2020～2023 年度、4,420 千円（直接経費：3,400 千円）
2. 研究対象である壁画の保存修復は、文化財保護・芸術研究助成財団と住友財団の助成を受けて、2016 年度から 2019 年度までウズベキスタン考古学研究所と共同で実施した。
  - ・文化財保護・芸術研究助成財団：事業助成  
事業名：ファヤズ・テペ遺跡出土仏教壁画の保存修復  
助成額：2016～2018 年度、700 千円
  - ・住友財団：海外の文化財維持・修復事業助成  
事業名：ウズベキスタン、ファヤズテパ仏教遺跡出土壁画の保存修復  
助成額：2017～2019 年度、3,700 千円保存修復を行った壁画については、影山悦子・M. A. レウトヴァ・K. アブドゥルラエフ（編）『ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究』（JSPS 科研費成果報告書）名古屋大学人文学研究科／名古屋大学高等研究院、2021 年参照。
3. 本書は影山悦子、石松日奈子、吉田豊が執筆し、影山が編集作業を行った。石松と吉田の論考は、2019 年 10 月 29 日に奈良文化財研究所で開催した「中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」において口頭発表した内容をもとにしている。また、2021 年 5 月にファヤズテパ遺跡 B 区第 8 室右壁（北西壁）の壁画片（黒色顔料）の放射性炭素年代測定をパレオ・ラボに依頼した。発掘の際に壁画を保護するために塗布された合成樹脂の影響等により、予想よりもはるかに古い年代が得られたが、結果を公表することにする。



## 目次

ファヤズテパ仏教遺跡 B 区中庭の壁画の内容と構成について-----	影山悦子	1
ファヤズテパの仏教遺物		
—僧院区 B-8 室から出土した仏像と供養者像壁画の検討—-----	石松日奈子	15
ファヤズテパ壁画に添えられたバクトリア語銘文の書体による年代判定 および関連する問題について-----	吉田豊	37
放射性炭素年代測定-----	パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ	73



バクトリア地図

(『NHK スペシャル文明の道』2 ヘレニズムと仏教, 日本放送出版協会, 2003年, p. 188)

## ファヤズテパ仏教遺跡 B 区中庭の壁画の内容と構成について

影山悦子

ファヤズテパ遺跡は、ウズベキスタン南部のテルメズ市近郊に存在する仏教遺跡の一つである。1968年から76年まで、L. I. Al'baumによって発掘が行われ、創建はクシャーン朝時代に遡ることが明らかにされた<sup>1</sup>。寺院址は仏塔と長方形のプランを持つ僧院から成る。僧院はほぼ正方形の3つの区画が縦に並んだ構成で（A区、B区、C区）、中央に位置するB区の横軸が仏塔の中心を通る配置となっている（図1）。B区の中央には長方形の中庭（20×30m）があり、三方を20ほどの部屋（僧房）が囲む。中庭の周りには柱の礎石が一定の間隔で設置されており、もとは僧房の壁に沿って回廊が巡らされていた。また壁に沿って粘土製のベンチが設置されていたことも報告されている。B区の入口（B19室）の正面に位置するB8室は、他の部屋とは異なり、室内から壁画、石彫像、塑像が発見されている。そのため、釈迦が暮らしたとされる香堂（gandhakuti）の役割を果たしていたと推定されている（Fussman 2011, pp. 21-25, pp. 262-268）。

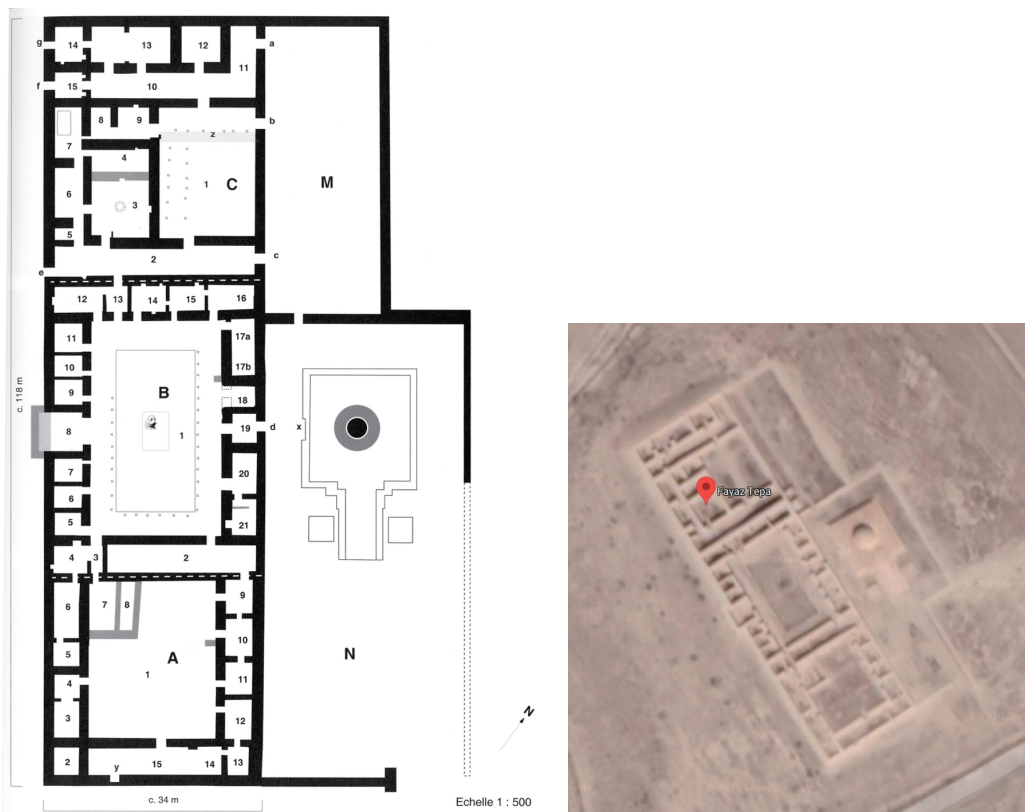


図1 ファヤズテパ遺跡平面図（Fussman 2011, pl. 21）、衛星写真（Google Map）

<sup>1</sup> ファヤズテパ仏教遺跡の発掘については、影山・レウトヴァ・アブドゥルラエフ 2021, pp. 5-7を参照されたい



## 1. B区中庭の周壁を飾っていた壁画に関する Al'baum の報告

B区の中庭の周りの壁面にも壁画の痕跡が確認されており (Al'baum 1991, p. 107)、当初は周壁全体に壁画が描かれていたと推測されるが、中庭の西側 (正確には南西側) の中央部分、すなわち祠堂 (B8 室) への入口 (幅 1.5m) 付近で、壁画の痕跡が他よりもはっきりと認められた (Al'baum 1990, p. 21)。壁画が見つかったのは壁面の下部に限られていたと述べている (Al'baum 1974, p. 55)。Al'baum は、B8 室内部を飾っていた壁画については詳しく記述しているが、中庭で発見された壁画の内容については、以下の通り、簡単な記述しか残していない:

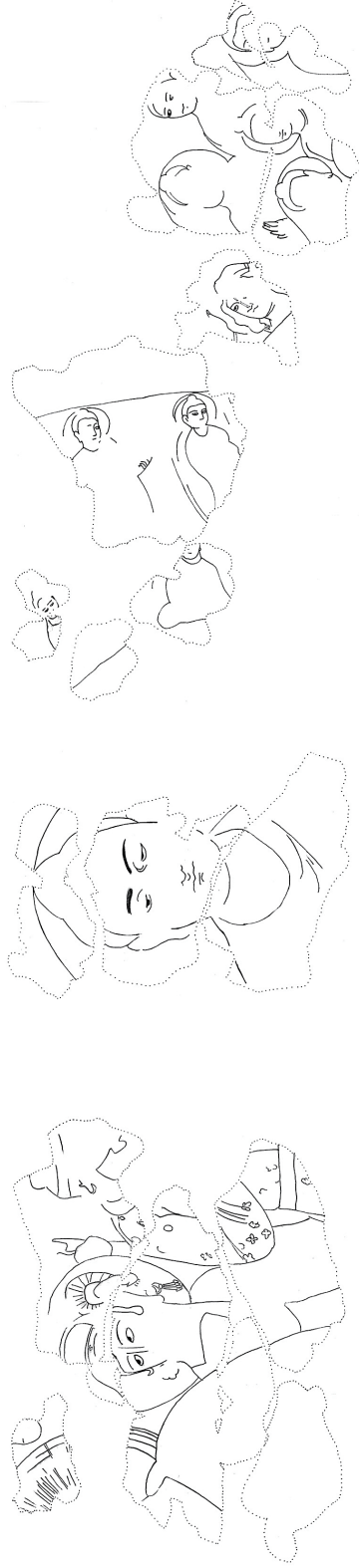
- ・寺院の中庭の壁に沿ってアイワン (屋根付きの柱廊) があり、壁面は壁画で覆われていた。現在までに、中庭の南側 (正確には南西側) 中央に隣接する部分が発掘されている。壁画の大部分は壁から落ちて、床の上に層になって重なっていた。保存された断片 (複数) には、中心となる仏陀がよく見える。その周りには菩薩や供養者の小さな姿がある (Al'baum 1975, p. 90)。
- ・ファヤズテパの中庭の南壁 (正確には南西壁) に描かれた何人かの人物も (エジプトのファユムの肖像画と) 同じくらい、目が大きく、特徴的である (Al'baum 1975, p. 93)。
- ・B8 室への入口付近には、頭光をつけた仏陀頭部が残されていた。その右側には小さな立仏 (複数) と坐仏 (複数)、僧侶 (複数)、世俗の信徒 (複数) が隣接しており、一方、左側には仏陀の方に歩み寄る地元の神々の姿があった (Al'baum 1991, p. 107)。

## 2. ウズベキスタン国立歴史博物館に展示されているファヤズテパ遺跡出土壁画

ウズベキスタン国立歴史博物館には、ファヤズテパ遺跡から出土した壁画の実物が展示されている (図 2, 3)。展示ケースは 3 つの部分に仕切られており、右の区画には男性供養者、中央の区画には仏陀頭部と小さな坐仏・立仏など、左の区画には仏陀の背後に立つ女性供養者などを表す壁画が展示されている。壁画はいずれも小さな断片から成り、壁面から剥がれ落ちて堆積した状態で発見されたこと、また、出土位置や図像を根拠に、本来の位置が復元されたことがうかがえる。



図 2 ファヤズテパ遺跡出土壁画 (ウズベキスタン国立歴史博物館展示室)



仏陀1 人物1 人物2 仏陀2 坐仏1,2 立仏1,2 人物3 坐仏3~7

図3 B区中庭で発見されたと推測される壁画の現在の展示状況（撮影：飯田ゆりあ）と線図（筆者作成）  
（この部分の展示ケース内側のサイズ：縦約82cm、横約380cm）

Al'baum の報告により、右の区画の男性供養者（図 2）は B8 室前壁（北東壁）の左壁側で発見されたことが確認される。一方、中央と左の区画の壁画（図 3）は、中庭の南壁（南西壁）で発見されたと Al'baum が報告する上述の壁画の内容と一致するように思われる。B8 室の入口付近に残されていたとされる「頭光をつけた仏陀頭部」は、中央の区画に展示されている仏陀頭部（図 3 の仏陀 2）を表す断片であり、その右側に隣接していたとされる「小さな立仏（複数）と坐仏（複数）」は、仏陀頭部のすぐ右側に展示されている立仏と坐仏を表す壁画（坐仏 1,2 と立仏 1,2）であるに違いない。「世俗の信徒（複数）」には、立仏の右側に展示されている長髪の男性（人物 3）が含まれるのかもしれない。展示されている壁画に「僧侶（複数）」は認められないが、長髪の男性の右側に展示されている五体の坐仏を僧侶の集団とみたのかもしれない（坐仏 3～7）。一方、頭光をつけた仏陀頭部の左側から「仏陀の方に歩み寄る地元の神々」とは、左の区画の右端の顎髭を生やした男性像（人物 2）のことかもしれない。男性像と仏陀頭部との間に仕切りはあるが、実際には両者は一つの画面を構成していた可能性がある。また、Al'baum は中庭で見つかった壁画の人物像は、目が大きいことを指摘している。これは左の区画の女性（人物 1）のことを念頭においていると思われる。顔の部分の保存状態が良く、左側の仏陀（仏陀 1）を見つめる大きな目を確認することができる。

### 3. B 区中庭で発見されたと推測される壁画の内容と構成

ここからは、ウズベキスタン国立歴史博物館に展示されているファヤズテパ遺跡出土壁画のうち、B 区中庭の B8 室への入口付近に描かれていたと推測される壁画断片について、その内容と構成について考えてみたい（図 3）。

一際大きく表されていたのは頭光をつけた仏陀で、少なくとも二体描かれていたことが分かる。一体は首から上の部分が良い状態で残されている（仏陀 2）。もう一体は、前述の女性供養者の左側に描かれていたが、頭部は欠損しており、赤褐色の袈裟の一部（左肩部分）と頭光の一部のみが残されている（仏陀 1）。このことから、B 区中庭の周壁の壁画は、仏陀を中心とする複数の場面によって構成されていたと推定される。以下では現存する二体の仏陀を中心に、それぞれの場面の登場人物と内容について見ていくことにする。

#### 3-1. 左側の仏陀（仏陀 1）と女性供養者

はじめに、女性供養者の左側に描かれていた仏陀（仏陀 1）を中心とする場面について見ておきたい（図 4）。仏陀の頭光は白色だが、外縁は水色で、細かい線が放射状に引かれているのが辛うじて確認できる（図 5）。残存部分から頭光の円の大きさのある程度推定することができる。図 5 の断片は正確にはもっと上方に配置すべきである。

仏陀 1 の背後には、頭光をつけた女性供養者が描かれている。この人物については、これまで、アレクサンドロス大王や、ファッロー神またはウルスラグナ神、もしくはウルスラグナ神にちなんだ名前の男性供養者とする解釈もあったが、現在では裕福な女性供養者

とする F. Grenet の解釈が支持されている。また、この人物は一对の牡羊の角を頭に付けていると考えられてきたが、筆者は、向かって右側の牡羊の角のように見えるものは、ガンダーラの石彫像の女性が付ける刻み目のあるリング状の飾りのようなものではないかと考えている<sup>2</sup>。この場面の背景は、女性の頭光の周りに見えている濃い青色である。女性の頭光の右側と左上には蓮の蕾のような形をした白い物体が描かれている。これは、B8 室内の男性供養者や女性供養者の足下に描かれている白い物体と同じものを表しているのかもしれない。

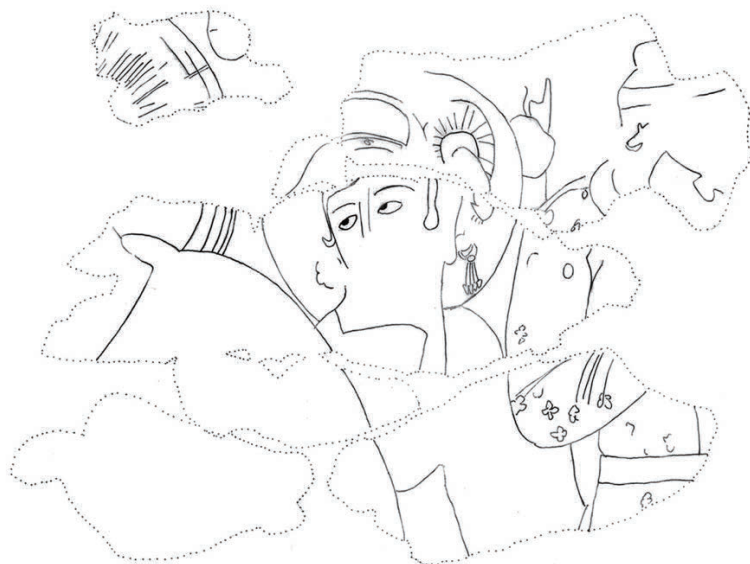


図4 仏陀1と人物1,2を表す壁画(田辺・前田1999, 図版156)と線図

<sup>2</sup> この人物像に関する先行研究と、頭飾に関する筆者の提案については、影山・レウトヴァ・アブドゥルラエフ 2021, pp. 14-15, 39-40 を参照されたい。



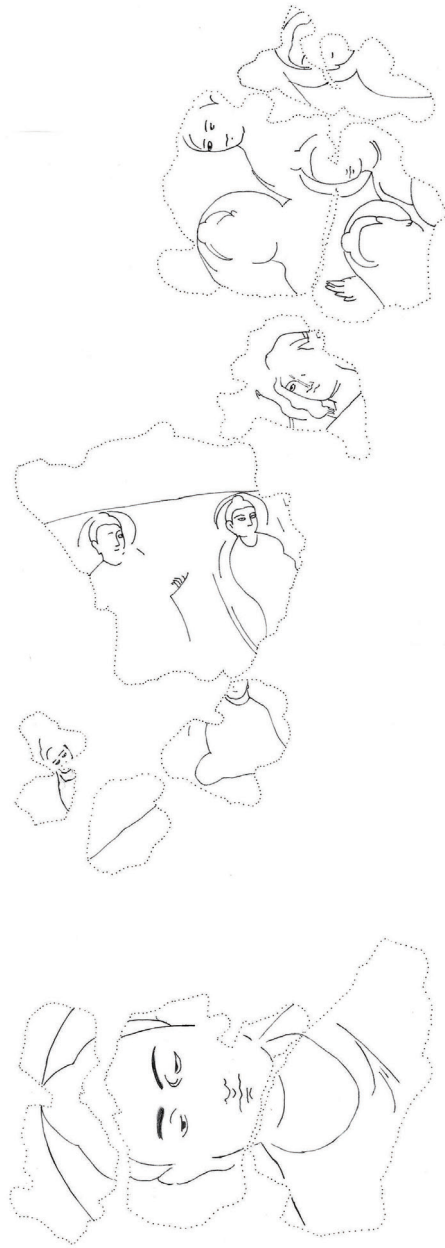
図5 仏陀1の頭光の一部：放射状に細い線が引かれている。外縁部は水色（筆者撮影）

### 3-2. 右側の仏陀（仏陀2）と小さな立仏と坐仏（図6）

もう一体の仏陀は顔の部分が良く残っている。正面観で表され、目は半眼である（図7左）。頭光は白色で表され、ちょうど肉髻の高さのところに、頭光の内側の線が引かれている。外縁が残されていないため、頭光の全体の大きさは不明である。右側には坐仏二体と立仏二体を表す断片が、身体が右斜め方向に傾いた状態で展示されている。その右側には長髪の男性の頭部と坐仏五体を表す断片が展示されている。長髪の男性は右手を挙げているように見える。散華する姿を表しているのかもしれない（図7右）。

川崎はこの部分の壁画に関する専論を発表している（Kawasaki 1999）。まず、この壁画が祠堂(=B8室)の外壁近くの堆積物の中から発見されたという重要な情報を与える。そして、大きく表された仏陀の目が半眼であることや全体の構図から判断して坐像であること、その光背部分に化仏を放射状に配置する構図は、ガンダーラのタフティ・バーイ出土の彫刻などに見られる仏陀の周りに化仏を放射状に表す構図と類似することを指摘する（図8）。さらに、これらのガンダーラの石彫は、『法華経』や『如来蔵経』などの大乘經典の冒頭部分に記される仏陀の光の奇瑞（「大光明の神変」）を表現しているとする宮治の研究をもとに<sup>3</sup>、川崎は、ファヤズテパ遺跡の当該壁画が大乘經典の内容に依拠して描かれた可能性が高いとする。そして、祠堂の中で見つかった他の人物も「大光明の神変」の目撃者として解釈することを提案している。また、『法華経』の成立は1～2世紀、『如来蔵経』の成立は3世紀半ばとされ、Al'baum が推定する寺院が機能していた期間と一致することを指摘している。

<sup>3</sup> 宮治 1996, pp. 248-259. 宮治による最新の研究は宮治 2021 参照。



坐仏 3~7

人物 3

立仏 1,2

坐仏 1,2

坐仏 1,2

図 6 坐仏 2 と坐仏・立仏他の展示状況（撮影：飯田）と線図



↓右手の親指か？



図7 左：仏陀2 (Pidaev 2011, p.62) 右：人物3 (Pidaev 2011, p. 63)

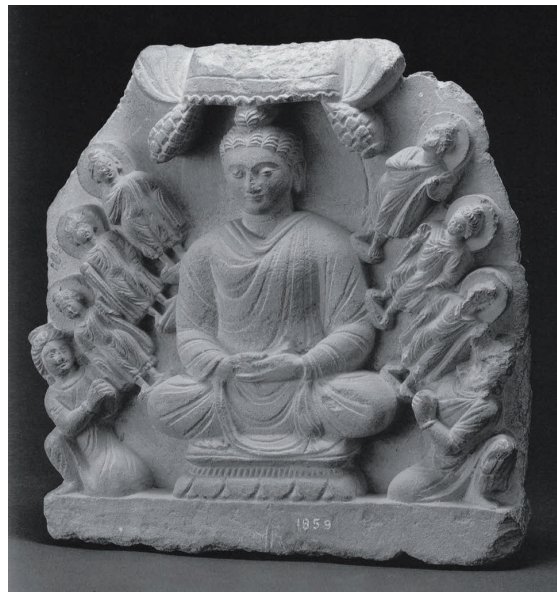


図8 ガンダーラ、タフティ・バーイ出土彫刻 (樋口 1984, I-10)

宮治の最近の研究によれば、大乘仏教と関係のあるガンダーラの彫刻は80例ほどが確認され、図像形式から「三尊タイプ」「発出タイプ」「楼閣タイプ」「蓮池タイプ」の4つに分けられる。出土地が判明しているものはペシャワール周辺の仏寺址に限られ、制作年代は一部2世紀に遡るものもあるが、大半は3世紀から4世紀であるとしている(宮治 2021, p. 4)。図8のタフティ・バーイ出土の石彫は、蓮華座に結跏趺坐して禅定印を結ぶ仏陀の両側に放射状に三体の立仏を表している。これは「発出タイプ」に分類されている。「発出タイ

プ」は、立仏の足下に蓮華座を表すのが特徴で、「仏陀が衆生を救うために三昧に入り、大光明を發し、その光が無量の蓮華となって、それらにみな仏陀が現れる」様子を表現したものであることを明らかにされた（宮治 2021, pp. 7-8）。

ここで、もう一度ファヤズテパ壁画の立仏二体を表す断片を見ておきたい（図9, 10）。頭光と光背をつけるが、その外側も同じ白色である。外側の白色は仏陀が發する「大光明」を表したものであろう。上方の立仏（立仏1）の左腰のあたりに見えるのは、色から判断して左手の指だろうか<sup>4</sup>。下方の立仏（立仏2）の頭光と光背を表す仕上げの赤い線の少し内側に下書きの黒い線が見える。二体の立仏の足下には坐仏が描かれていたと復元されている。これは立仏の足下近くに見える黒い部分と白い部分を、坐仏の頭部と頭光の一部とみなしたことによる復元であると推測されるが、この部分は模糊としていて、輪郭線は認められず、立仏の足下に坐仏を復元する根拠はないように思う。一方で、ガンダーラの「發出タイプ」の特徴である蓮華座の有無を確認することもできない。また、二体の立仏の顔は下を向き、視線も斜め下に向かっている。立仏の視線は仏陀の方に向かうはずであるから、この二体の立仏は、本来、仏陀の左側に、身体を斜め左に傾けた姿で描かれていたと考えられる。この断片は仏陀2の左側に描かれていたか、もしくは、仏陀2を中心とする構図ではなく、その右側に描かれていた可能性のある仏陀3の左側に描かれていたのではないだろうか。

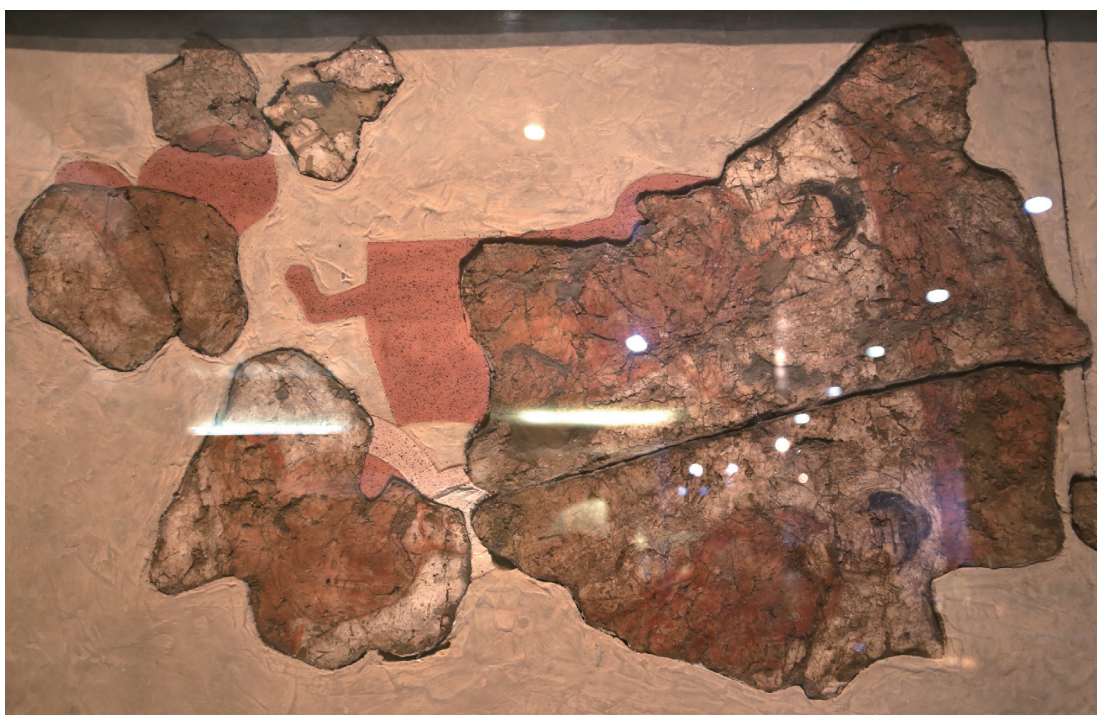


図9 二体の立仏（立仏1, 2）：現在の展示では視線は斜め下に向かう

<sup>4</sup> 川崎の観察によれば、上方の立仏（立仏1）は、右肘を曲げて施無畏印を結び、左手を腰のあたりで握り、袈裟の端をつかんでいるようであるという（Kawasaki 1999, p. 56）。





図10 立仏1,2 (撮影：飯田) 展示されている状態から反時計回りに90度回転  
 左：立仏1、肌の色がよく残っている、右：立仏2、頭光と光背の下書きの黒い線が見える

さらに、宮治が大構図の「楼閣タイプ」の作例として挙げるのが、ガンダーラのサーリ・バロール出土の彫刻である（図11）。楼閣建築の中に結跏趺坐し転法輪印を結ぶ仏陀を表し、両側に菩薩立像を表す。画面上部には龕内に坐す仏・菩薩を表す。上段中央には仏塔を表し、その右側には「燃灯仏授記」、左側には「アショーカ王受記（施土供養）」を表すとされる（宮治 2021, pp. 10-14）。

ところで、ファヤズテパ遺跡出土壁画には、仏塔と半裸の男児を表す壁画がある（図12）。これらの断片がどこで見つかったかは報告がなく不明であるが、仏塔を表す断片の背景は青色で、中庭の周壁で見つかったと推測される仏陀1と女性供養者を表す壁画（図4）の背景と同じである。仏塔と半裸の男児は単独の図像ではなく、サーリ・バロールの彫刻のような大構図の一部であったのではないだろうか。さらに想像をたくましくすれば、長髪の人物3は、燃灯仏に散華するメーガ青年を表しているとも考えられる。ただし、ファヤズテパの壁画には、「楼閣タイプ」に特徴的な柱やアーチを表す断片はほとんど認められず（例外として、図12右の半裸の男児の背後に見える黒い部分は建物の一部か）、筆者の推測とは合わない。

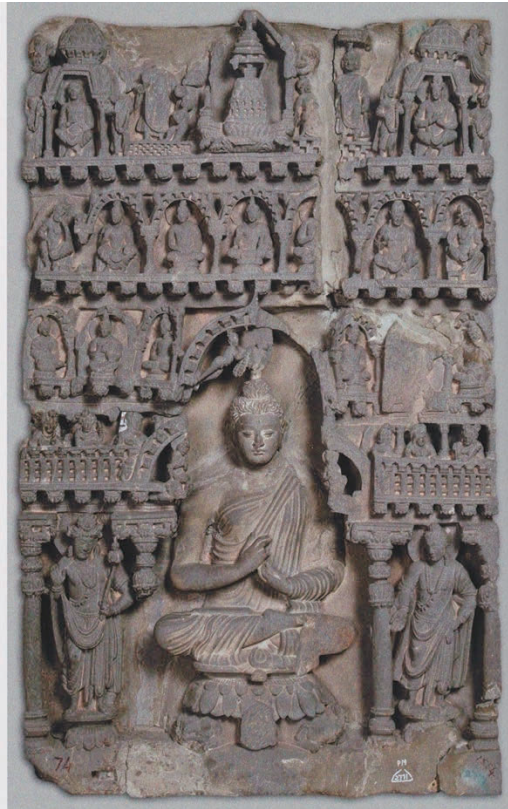


図 11 ガンダーラ、サーリ・バロール出土彫刻 (Gandhara 2008, p. 254, fig. 1)、上段中央部分

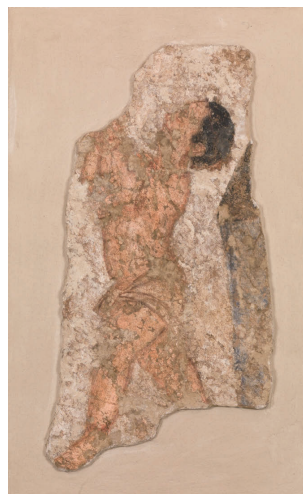
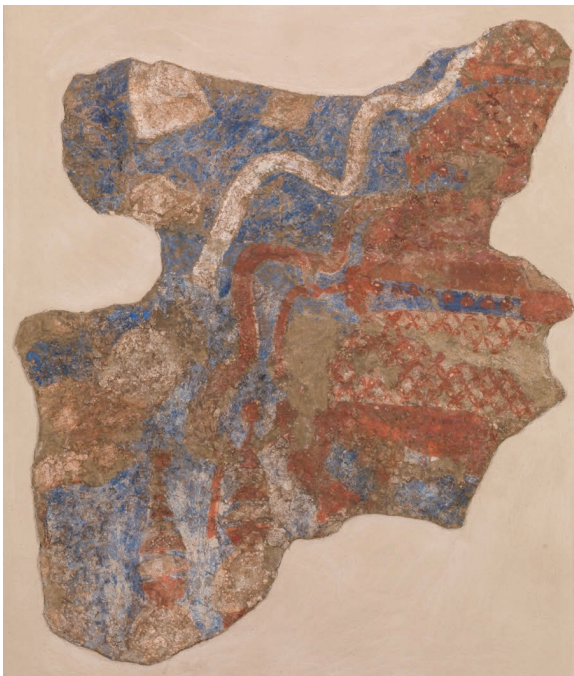


図 12 左：仏塔の傘蓋部分と小さな仏塔二基（縦 71cm）、右：半裸の男児（縦 52cm）  
 ファヤズテバ遺跡出土（撮影：飯田）

#### 4. おわりに

本稿では、ファヤズテパ遺跡の僧院の中央部を成し、仏塔に隣接する区画の中庭を飾っていたと推測される壁画の内容と構成について考察を行った。対象となる壁画は博物館に展示されてはいるものの、Al'baumによる報告がわずかしかなかく、また、鮮明な写真が公表されていない部分もあり、研究が進んでいない。本稿の執筆にあたり、ガラスケース越しに撮影した写真をもとに、線図の作成を試みたが、彩色面の傷と輪郭線との区別が難しく、正確な描起図を作成することはできなかった。細部の正確さは劣るが、作成した線図によって、B区中庭の壁画が、大きく表された仏陀を中心とする複数の場面から構成されていたことを示すことができたと思う。小さな立仏の図像から、ファヤズテパ壁画と大乘仏教との関係を指摘された川崎の論考と、ガンダーラの大乗仏教美術に関する宮治による最近の研究成果をもとに、関係するガンダーラ彫刻の図像とファヤズテパ壁画の比較を行った。仏教美術を専門としない筆者には共通する図像を指摘することしかできないが、この覚え書きが今後の研究の足がかりとなれば幸いである。

[付記] 図12に挙げた2つの壁画の保存修復は、文化財保護・芸術研究助成財団の助成によるものである。記して感謝申し上げます。

#### 参考文献

- Al'baum 1974: Альбаум, Л. И., Раскопки буддийского комплекса Фаяз-тепе (По материалам 1968-1972 гг.) // Древняя Бактрия, с. 53-58.
- Al'baum 1975: Альбаум, Л. И., Живопись Афрасиаба, Ташкент (L. I. アリバウム (加藤九祚訳) 『古代サマルカンドの壁画』1980, 文化出版局).
- Al'baum 1976: Альбаум, Л. И., Исследование Фаяз-тепе в 1973 г. // Бактрийские древности, Ленинград, с. 43-45.
- Al'baum 1982: Альбаум, Л. И., О толковании каратепинских комплексов (в свете раскопок Фаяз-тепе) // В. Я. Ставиский (ред.), Буддийские памятники Кара-Тепе в Старом Термезе, Основные итоги работ 1974-1977 гг., Москва, с. 56-63.
- Al'baum 1990: Альбаум, Л. И., Живопись святилища Фаязтепа // Г. А. Пугаченкова (ред.), Культура Среднего Востока: Изобразительное прикладное искусство, Ташкент, с. 18-27.
- Al'baum, L. I. 1991: "Fayaztepa", K. A. Abdullaev et al. ed., *Culture and art of ancient Uzbekistan*, vol. 1, Moscow, pp. 107-112.
- Fussman, G. 2011: *Monuments buddhiques de Termez I : Catalogue des inscriptions sur poteries 1 : Introductions, catalogues, commentaires 2 : Planches, index et concordances, résumés*, Paris.
- Gandhara 2008: *Das buddhistische Erbe Pakistans, Legenden, Klöster und Paradiese*, München.
- Kawasaki 1999: Кавасаки, К., К интерпретации тематической росписи на Фаязтепа // Общественные науки в Узбекистане, 1999/3-4, с. 55-58.

Pidaev, Sh. 2011: *Buddhism and Buddhist Heritage of Ancient Uzbekistan*, Tashkent.

影山悦子・M. A. レウトヴァ・K. アブドゥルラエフ（編）2021『ウズベキスタン南部フアヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究』名古屋大学人文学研究科／名古屋大学高等研究院.

田辺勝美・前田耕作（編）1999『世界美術大全集』東洋編 15 中央アジア，小学館.

樋口隆康（監修）1984『パキスタン・ガンダーラ美術展図録』日本放送協会.

宮治昭 1996『ガンダーラ：仏の不思議』講談社選書メチエ 90.

宮治昭 2021「ガンダーラにおける大乘仏教美術の様相：「三尊タイプ」「発出タイプ」「楼閣タイプ」を中心に」『密教図像』40, pp. 1-24.



## ファヤズテパの仏教遺物

### —僧院区 B-8 室から出土した仏像と供養者像壁画の検討—

石松日奈子

はじめに

ファヤズテパ遺跡は仏塔 1 基と僧院区からなり、僧院区は三つの方形の区画が並んでいる。その中央が B 区で、礼拝のための場所であったと考えられている。B 区は仏塔側（北東）に入り口があり、内部は中庭を囲むように 20 の部屋が設けられている。その中央が第 8 室である（図 1）。縦横ともに約 6 メートルのほぼ正方形で、正面の壁（南西壁<sup>1</sup>）は黒一色に塗られ、北西壁は男性供養者群像の壁画、対する南東壁は如来立像 2 軀と女性供養者像の壁画、北東壁（前壁）は入り口の北側に男性供養者像壁画、南側に 2 軀の男性供養者像壁画が、それぞれ残っていた（アリバウム 1990<sup>2</sup>）（図 2）。壁画はかなり破損しており、現在は壁から外してウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所に移され、一部はウズベキスタン国立歴史博物館で展示され、また保存修復、科学的調査なども進められている。この場所では石灰岩を用いた彫刻や彩色を施した塑像も発見されており、ガンダーラ美術との関係がうかがわれる。

ファヤズテパ遺跡の建物はクシャーン期に建設されたのち、数度の改修を経ており、現存する彫刻や壁画の年代について確定には至っていない<sup>3</sup>。以下、石造如来三尊龕と供養者像壁画について検討する。

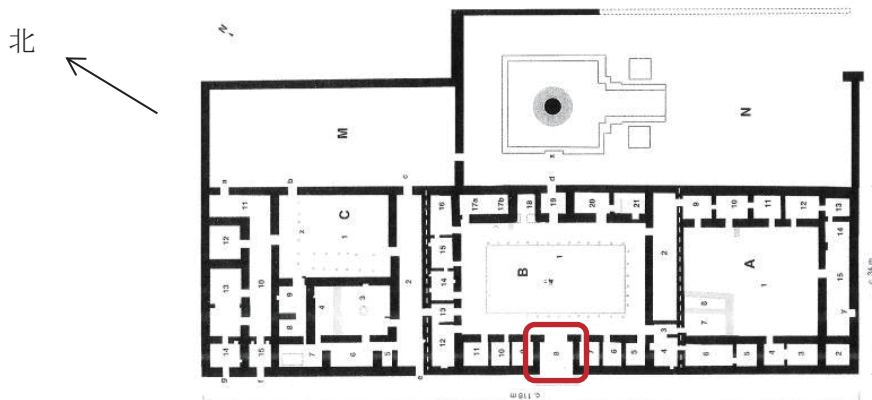


図 1 ファヤズテパ建築遺跡（フュスマン 2011） ※赤枠は第 8 室

<sup>1</sup> ファヤズテパ遺跡ではストーパーパが北西—南東を縦軸線とするため、付設された第 8 室では南西方向が正壁となる。

<sup>2</sup> この報告書（ロシア語）については影山悦子氏の翻訳による。

<sup>3</sup> ファヤズテパ遺跡に関する基本的な文献については、2021 年の報告書（影山他 2021）を参照されたい。



図2 B-8室 遺物配置図

※南東壁線図（アリバウム 1990 を加工）。北西壁～北東壁北側模写（影山他 2021）

### 1. 石造如来坐像龕 ウズベキスタン歴史博物館蔵

1972年に発見された石造如来坐像龕（図3-1、3-2）は、第8室正壁（南西壁）中央の低い台座上に安置されていたと伝えられる（ピダエフ 2019, p.23）。側面および背面（図3-3）はなだらかな曲面状を呈し、彫刻は施されていない。材質は白色の石灰岩で、全高72センチ幅は63センチ 厚さが28センチあり、大きさも十分であることから、この部屋の中心的な尊像として正壁に安置されていた可能性が高い。龕の中には目を伏せて静かに禅定する如来坐像を中心に、左右に比丘（図3-4）が侍立し、三尊の背後から頭上にかけて菩提樹の枝葉を精妙な透かし彫りで刻んでいる。ブッダは頭髮にゆるやかなウェーブ状の毛筋を刻み、袈裟を通肩にまとい、両手は膝の上で重ねて禅定印をむすぶなど、一見して典型的なガンダーラ様式の如来坐像（図4-1～4-3）である。脇侍の比丘は左右ともに両手の臂から先を欠損しているが、おそらくブッダに向かって合掌していたと思われる。袈裟を偏担右肩にまとい、大きな目に瞳を刻み、驚鼻の彫りの深い顔立ちが印象的である。左脇侍（向かって右）は額上部がわずかに盛り上がり、釈迦の弟子の中で最年長であった迦葉をイメージさせる。本像は龕像としての図像構成も彫刻の技術も完成度が極めて高く、破損箇所も少なく、ファヤズテパの仏教遺物中で最も美しい彫刻と言ってよい。

図3 石造如来坐像龕



3-1 石造如来坐像龕 正面 (奈良県美 1988)



3-2 同 左斜め (岡田健氏撮影)



3-3 同 背面 (岡田健氏撮影)



3-4 同 脇侍比丘像 (岡田健氏撮影)





図4 波状髪、通肩、禪定印のガンダーラ式如来坐像



4-1 コリヤン・タガイ出土  
2～3世紀 コルカタ博物館  
(石松撮影)



4-2 チャンディガル博物館  
2～3世紀 (石松撮影)



4-3 ママーネ・デリー出土  
3世紀 (東博2002)

この中尊如来坐像はガンダーラ様式ではあるが、子細に観察すると以下のようにいくつかの特徴的な表現が指摘できる。

①肉髻が小さい

中尊の頭髪はゆるやかなウェーブ状の毛筋を刻み、頭頂部に小さめの髻を結び、その根元を細い二本の紐で縛っている。如来の頭頂部の盛り上がった部分はふつう「肉髻」、あるいは「頂髻」と呼ばれるが、ガンダーラの仏像の多くは本像のように髪を束ねて結った状態に表わす。本像の肉髻はガンダーラ仏に比べて盛り上がりが少なく、髻自体が非常に小さいという特徴がある。同様の肉髻表現はファヤズテパ遺跡で発見された壁画(図5-2)やカラテパの壁画(図5-3)などにも認められ、テルメズ地区の如来像の特徴と考えられる。

②耳朶が平板で環状のくぼみを表す

ガンダーラの仏像(図5-4、5-5)の耳は初期のものではリアルな人間の耳のかたちを表現しているが、様式化が進むと耳朶が長く伸びて平板になり、縦長の環状のくぼみや孔が穿たれるようになる。本像の場合、両耳とも耳輪部はリアルな耳を表現するが、残存する左耳朶(右は欠損)は平板で長く伸び、縦長の環状のくぼみがある。左右に立つ脇侍比丘像のリアルな耳と比べるとその違いは明らかである。したがって、本像の耳は「仏像の耳」としての様式化がある程度進んでいると判断できる。

③丸顔で眉間に小さく白毫を表す

中尊如来坐像の顔は丸顔に近く、目は伏せて、ほんのかすかに開いている。眉間にごく小さく白毫を浮き彫りする。このような面貌はファヤズテパで出土した壁画(図5-2)や、カラテパ出土の壁画(図5-3)に共通し、この地域で共有された表現と思われる。また、

丸顔や眉間の小さい白毫はアフガニスタン北部のカーピシーの石彫像（図 5-6）に類似するが、本像のなだらかな彫刻面による穏やかな面貌に対して、カーピシー像は頭髪や目元の凹凸をくっきり彫り出す傾向があり、共通する図像をもとにしながらも、それぞれの地域性や民族性が顔の造形に表れているのであろう。

図 5 如来坐像頭部の比較



5-1 ファヤズテパ 如来坐像  
(奈良県美 1988)



5-2 ファヤズテパ  
如来像壁画 (ピダエフ 2019)



5-3 カラテパ 如来像壁画  
(ピダエフ 2019)



5-4 チャンディガル博物館  
2～3 世紀 (石松撮影)



5-5 ストゥッコ製仏頭  
5～6 世紀  
(東京藝大美術館 2000)



5-6 焔肩仏坐像 カピシー  
出土 3～4 世紀 個人蔵  
(東京藝大 2002)

#### ④薄い衣と紐状の衣文

袈裟は通肩に着け、両足先まで覆っている。薄く表現された衣をとおして肉体の起伏がわかる。さらに紐状の衣文線が左肩や両脇下、禅定印をむすぶ手、膝前などの要所要所で美しく整えられ、肉体の存在を効果的に表している。このような衣文表現は、カーピシーの石彫如来坐像（3～4世紀）（図6-2）にも見られる。ただし、カーピシーの如来坐像の膝前に垂れる衣文は、多くのガンダーラ仏と同様にU字形をつくるのに対し、ファヤズテパの如来坐像龕では袈裟の裾を膝下に敷き込んでいるためU字形をつくらない。これは次の⑤に挙げるテルメズ出土の石像にもみられ、テルメズ特有の表現といえるかもしれない。

図6 ファヤズテパとカーピシーの如来像



6-1 ファヤズテパ 如来坐像  
(奈良県美 1988)



6-2 カーピシー出土 石彫如来坐像  
3～4世紀 個人蔵 (東京藝大 2002)

#### ⑤衣を巻き込む禅定印と膝前の衣文

ふつう禅定印は両手を膝の上で上下に（多くは右手を上、左手を下）重ね、両手先を衣から出すか、または衣の中に納めるか、のいずれかで表現される。ところが、本像の場合はそのどちらでもなく、両手の第一指と第二指の間に衣を挟んで巻き込むように造られている（図7-1）。このような禅定印は管見のかぎりでは類例が見当たらず、本像独特の表現と思われる。なお、テルメズ出土とされる石造仏伝図浮彫像（3世紀）（図7-2）で、下段のブッダ像の禅定する指の状態（一部破損しているが）が本像によく似ており、このかたちもテルメズの地域的特徴かもしれない。また、前述したように、多くのガンダーラの坐仏が膝前にU字形の衣裾を造るのに対して、これらテルメズの2件はその表現がないという点も共通する。

図7 禅定印の手と衣の表現



7-1 ファヤズテパ 如来坐像  
(奈良県美 1988)



7-2 テルメズ出土石像 3世紀 (ピダエフ 2019)



本像の製作年代については、アリバウムやピダエフはクシャーン朝の治世、紀元1~2世紀とする早い年代を与えているが、宮治昭は「図像形式の基本はガンダーラのもの共通するが、坐仏の紐状の衣文線、菩提樹の文様の表現など、この地の特徴もうかがわれる。ガンダーラの図像をもとにしながら、この地で解釈し直し、制作されたもので3~4世紀頃のもの」(宮治昭 2002)と推測している。

筆者も本像がガンダーラ様式に則った作品であることに異論はないが、上述したような①小さい肉髻、②平板で環状のくぼみを表す耳朶、③眉間の小さい白毫、④薄く紐状の衣文表現、⑤指で衣を巻き込む禅定印、など独特の表現があり、様式的にはアリバウムやピダエフが思う年代よりは遅れると感じている。また、カーピシーの石彫像と図像面での共通点が多いことが判明し、カーブルを中心としたガンダーラ美術がカーピシーを経由してバクトリア方面へ向かった可能性がある。しかし、テルメズとカーピシーの作風の違いは顕著であり、共通する図像がそれぞれの地で異なる表現によって造形化された、と解すべきであろう。また、本像の年代の下限をどこに置くかについては、壁画と一具であった可能性もあり、壁画の年代が問題となってくる。3世紀前半にササン朝の支配が及ぶと、仏教寺院をとりまく環境にも変化が起きたと考えられるが、本像にはササン美術の影響は見いだせない。

## 2. 供養者像壁画

次に第8室内部の壁に描かれていた壁画について検討する。第8室の内部は幅6メートル、奥行6.1メートルのほぼ正方形の平面で、壁画は北東壁(入り口側)、南東壁、北西壁で発見され、いずれも高さ1.5メートルくらいの下半部分と考えられる(アリバウム 1990)。本稿では主に服飾という観点から壁画の内容を検討するが、2017~2019年に実施された保存修復作業や自然科学的調査により、壁画の下地や彩色法、使用された顔料などについて新知見が報告されており(田村朋美・柳成焜・M.A.レウトヴァ 2021)、今後、材料や技法面からの研究がおおいに期待される。

北東壁は入り口の両側にそれぞれ男性供養者像、南東壁は如来立像と女性供養者像、北西

壁は男性供養者群像が描かれていたが、現在はほとんどの像が上半身を欠き、頭部が残っているのは北東壁南側の男性 2 体のみである。また、人物の向きから判断すると、北東壁南側の男性 2 体は南東壁方向に向かっており、南東壁に描かれた女性供養者像の後方に連なる構成であったと想像できる。同様に北東壁北側も北西壁の男性供養者列像に接続しているとみてよい。そこで、(1) 南東壁と北東壁南側を「南壁グループ」、(2) 北西壁と北東壁北側を「北壁グループ」、と大きく 2 つのグループとして検討する。

壁画の内容や年代に関する過去の研究については、影山氏の報告（影山他 2021）に詳しく述べられているので参照されたい。とくに、年代についてはアリバウム以来、クシャーン朝に描かれたと考えられてきたが、近年、ロ・ムズィオは壁画内容にササン朝美術の影響があるとして、バクトリア地域がササン朝の支配を受けるクシャノ・ササン朝～キダーラ・クシャーン朝、具体的には 4 世紀末またはそれ以降に下げる見解（ロ・ムズィオ 2012）を示し、一定の支持を得てきている。

しかし、筆者は壁画に描かれた供養者像の服装を検討した結果、第 8 室にはクシャーンの服装をした王とバクトリアの服装をした男女が描かれていることに気が付いた。よって壁画の制作年代については、クシャーンの支配がバクトリアに及んでいた 3 世紀半ば以前の可能性が高く、ロ・ムズィオの年代観と相容れない結果となった。以下、南壁グループ、北壁グループの順に検討する。

### (1) 南壁グループ（南東壁と北東壁南側の壁画）

南東壁で発見された壁画についてはアリバウムによる推定復元図（線画）（図 8）とスケッチによって考察する。復元図には 2 体の如来立像とそれぞれを左右から礼拝する女性供養者像が認められるが、影山悦子氏の考察によれば、発見された壁画断片は南東壁の西寄り（奥壁寄り）三分の二の下半部で、当初は入り口寄りにもう 1 体如来立像があり、全体としては 3 体の如来立像とそれぞれを囲む女性供養者像で構成されていたという。



図 8 南東壁の如来立像 2 軀と女性供養者像 ※断裂線の上部は想像（加藤 1997）

向かって左（本来は中央）の如来像は肘から下が残り、その左右に裾が長い衣服と膝下丈のケープ状の衣を羽織る女性各1 軀が立ち、如来像に向かって合掌している。向かって右の如来像は膝下のみが残り、その東側に女性像の下半身が残る。2 体の如来像は両足をやや開いてそれぞれ小さい蓮華を踏む。このような踏み割り蓮華上に立つ如来像が並立する構図は、バーミヤーン石窟やキジル石窟、近年発見されて保存の危機にあるメス・アイナク遺跡（アフガニスタン東部）など、中央アジアの壁画では珍しくないが、本壁画のようにブッダと同じ空間に大きな供養者像を伴う構成は珍しい。供養者像がブッダや菩薩と同じ空間に造られる例（図9、10）や、等身に近い供養者像（図25）の例はクシャーン時代のガンダーラ彫刻に多く見られ、寄進者の存在を誇示する意図があると推測される（石松 2014）。本壁画にはそうしたクシャーンの供養者表現が影響している可能性がある。



図9 弥勒菩薩と供養者 パイターヴァ出土  
（田辺・前田 1999）



図10 ブッダと供養者  
（栗田 1988）



図11 バラリク・テペ壁画  
（模写）（田辺・前田 1999）



図12 カラ・イ・カフィルニガン壁画（田辺・前田 1999）

また女性供養者像の服装で特徴的な丈の長いケープ状の衣服は、すでに指摘されているようにウズベキスタンのバラリク・テペ（6～7世紀）（図11）やタジキスタンのカラ・イ・カフィルニガン（7～8世紀）（図12）などの壁画に見られ、バクトリアの女性の服装と判断

できる（影山 2012）。ここで注意したいのは、女性たちがクシャーンの服装（図 9, 10）ではないという点である。如来像を礼拝する女性たちはクシャーンではなくバクトリアの女性ということになる。

北東壁南側で発見された壁画（現在ウズベキスタン国立歴史博物館に展示）は 2 人の男性の上半身部分（図 13）であるが、面部を残しているのが貴重である。2 人とも南東壁側を向く側面像で、前方のやや背が高い男性の体が後方の男性より前にある。ともに黒い頭髪を短く切り揃え、長い眉の下の目はやや上方を見据えている。2 人とも髭がないので年少の男性であろう。服装は円領（まるえり）・筒袖の衣で、左肩に服の打合せと思われる縦のラインが見え、左衽（左身頃を下、右身頃を上を重ねる）に打ち合わせている。下半身の壁画が残っていないので明言できないが、おそらく膝のあたりまでの丈の上衣であろう。前方像の衣服は白色で、えりに茶褐色の縁取りがある。後方像の衣服は黄色で、えりと打合せ部分にやはり茶褐色の縁取りがあり、さらにえりの打合せ箇所に赤色のリボン状の紐が結ばれているが、これはえりを開閉する際に結んだり解いたりする紐である。



図 13 北東壁（前壁）南側  
男性供養者像（田辺・前田 1999）

図 14 ペンジケントの壁画  
500 年頃（田辺・前田 1999）

図 15 敦煌莫高窟第 285 窟  
6 世紀前半（岡田健・劉永增  
2001）

また、これら 2 人は髪型や服装がタジキスタンのペンジケント遺跡の壁画<sup>4</sup>（ソグド）（図 14）や、アフガニスタンのディルベルジン遺跡の壁画（バクトリア）に描かれた男性像によく似ていることも指摘されている。2 人は南東壁の仏立像に向かって合掌する女性供養者像の後方に続く年少の男性であり、女性と同じくバクトリアである可能性が高い。

なお、同様の衣服は中国甘粛省の敦煌莫高窟第 285 窟（6 世紀前半）の「五百強盜婦仏因縁図」壁画（図 15）にも認められる。捕らえられた盗賊たちが衣服を剥ぎ取られる場面で、円領・筒袖、前開きの服が描かれており、えりと打合せのラインに沿って縁取りが施され、

<sup>4</sup> この男性の首周りのリボンはえりについていいるのではなく、首飾りの紐である。

えりの左右に紐が付いている<sup>5</sup>。同様の服装は第 285 窟北壁の男性供養者像にも見られ、その中にはバクトリア人と思われる家族が確認できる<sup>6</sup>。

## (2) 北壁グループ（北西壁と北東壁北側の壁画）

北西壁も壁画の上半部は失われているが、壁から剥ぎ取った際のスケッチ、アリバウムの報告書の線図（図 24）、近年の模写（M. スルタノヴァ作成）（図 16）によれば、北西壁から北東壁北側にかけて全 13 人の人物が描かれていたと思われる（近年の模写では、向かって左端の 1 体に該当する壁画断片が確認できなかったため描かれていない）。まず、北西壁は全 9 人で、中央にやや大きめの 1 人が両足を開いて立ち、その左右にそれぞれ 4 人ずつ立ち、供物らしきものを持つ者も確認できる。北東壁北側にも 4 人確認でき、これらは北西壁東端部の人物の後方に接続する。この中で北西壁中央像は衣服の裾と両足先が完全に見えているが、左右の人物の衣服の裾と足先は、それぞれ内側（中央像に近い方）の像によって一部が隠れている。つまり、中央像が最も前に立ち、左右から順次後方へ重なりながら並んでいる。

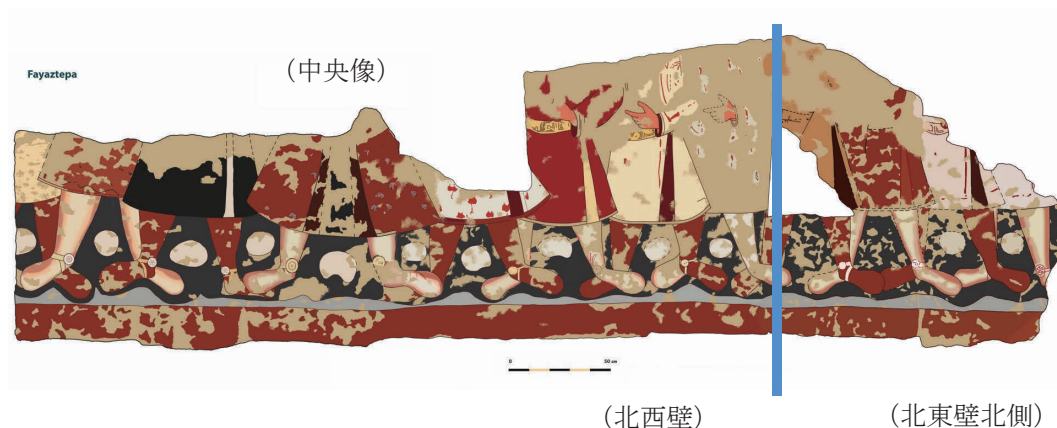


図 16 北西壁～北東壁北側壁画の模写（影山他 2021）

アリバウムはこれらの人物の服装や靴について考察し、スルフ・コタル（アフガニスタン）出土のカニシカ 1 世（在位 127～150 年頃）とされる石像（図 17）を例に挙げ、北西壁中央像がカニシカ王、左右は王を庇護する神々であるとした（アリバウム 1990）。筆者は中央がカニシカその人か否かは別として、クシャーーンの王を表しているという点には同意する。た

<sup>5</sup> このような筒袖の上衣とズボンを穿く服装は騎馬や遊牧といった移動型の生活や戦闘に適した服装といえ、中国では胡服（胡人の服）と呼ばれた。中国の周辺にいた異民族の服飾が中国の服飾文化に大きく影響し、唐時代以降は円領で筒袖の長い上衣が男性の常服となっていた。上衣の襟を V 字状に打ち合わせる交領は北方系、円領でリボン状の紐を結ぶのは西方系である。

<sup>6</sup> 石松日奈子「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』131、2010 年。



だし、左右の従者については別の解釈を示したい。

まず中央の人物像について検討する。残存するのは下半身のみであるが、外套のような服<sup>7</sup>の裾が左右に開いている様子が見え、中に別の衣服の裾がのぞいている。外套は丈が膝の下まであり、明らかに左右の従者たちの服より長い。外套の色は赤で、線描による花のような模様が見え、褐色の縁が付く。両足を左右に大きく開き、つま先が丸いかたちのブーツのような長靴を履く。この長靴は白っぽい色に見え、足首の位置で紐を締め、円形の留め具<sup>8</sup>を付けている。

このような外套、つま先が丸い靴、靴紐と円形の留め具、両足を開いて立つ像容などはアリバウムが指摘したように、スルフ・コタル出土像に近い。ただし、スルフ・コタル像はゆったりとした長いズボンを書く点が異なる。いっぽう、マート出土の砂岩製のカニシカ1世立像（図18）も長い外套や両足を開いて立つ姿、つま先が丸いかたちの長靴、足首の紐と円形留め具（図20）などが共通し、とくにブーツ状の長靴を履く点で、スルフ・コタル像よりより本壁画に近い。さらに、倚坐像ではあるが、マート出土の砂岩製のヴィマ・タクトゥ像（かつてはヴィマ・カドフィセスとされた）（図19）も同様の外套や長靴を着用し、靴紐と留め具もあり、前開きの外套と長靴という服装がクシャーンの王像に特徴的な表現であると見てよいであろう。



図17 カニシカ1世像  
スルフ・コタル出土 2世紀  
(アラード1968)



図18 カニシカ1世像  
マート出土 2世紀  
(肥塚・宮治2000)

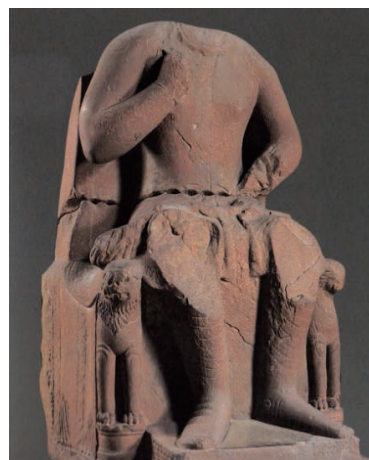


図19 ヴィマ・タクトゥ像  
マート出土 1~2世紀  
(肥塚・宮治2000)

<sup>7</sup> この衣服についてはアリバウム以来「カフタン」と称しているが、「カフタン」という用語はトルコ語起源とされ、クシャーン時代の衣服にこの名称を使用してよいか躊躇されるので、本稿では「外套」とする。

<sup>8</sup> アフガニスタンのティリヤ・テペ第4号墓（1世紀）から同様の靴の留め金具（図21）が出土しており、被葬者はクシャーンの男性王族とみられている（九博・東博2016）。



図20 カニシカ  
1世像(図18)の靴(石松撮影)



図21 ティリヤ・テペ出土  
靴の留め金具 1世紀  
(九博・東博 2016)

同様の服装をしたクシャーン王像はクシャーン朝のコイン(図22)にも数多く認められ、膝下丈の長い外套の前を開き、つま先が丸い長靴を履き、両足を開いて立つクシャーン王の雄姿が浮き彫りされている。テルメズではヴィマ・カドフィセスやカニシカ1世の銅貨(図23)も出土しており、クシャーン王の図像がテルメズでも知られていたことがわかる。



図22 カニシカ1世金貨  
2世紀(東京藝術大学 2000)



図23 テルメズ出土のクシャーンコイン(銅貨) 1-2世紀  
左: ヴィマ・カドフィセス 右: カニシカ1世  
(ウズベキスタン国立歴史博物館 2018)

次に北西壁の左右の人物について検討する。アリバウムは左右の人物たちも「カフタン」を着て腰にベルトを締め、中央の人物と同じ靴を履くが、「カフタン」の前身頃の前打合せが中央ではなく左寄りである、と記している(図24)。アリバウムは中央像と左右像で服の打合せ位置が異なることに気付いているが、さらに深く探求することはせず、中央像はカニシカ王、左右は王を庇護する神々であるとした。

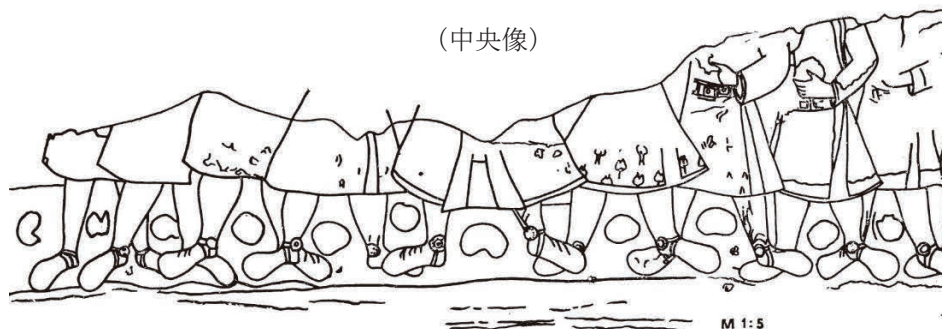


図24 北西壁壁画の線図(アリバウム 1990 よりトリミング)

そこで、左右像の服装をいま一度詳しく観察する。靴の表現はほぼ中央像と同じで、つま先が丸い形の長靴で、足首の位置で紐を巻き、円形の留め具を付けている。いっぽう衣服の方は中央像との違いが大きい。胸の高さまで壁画が残っている北西壁東寄りの従者たち（向かって右側）を観察すると、まずこれらは中央像のような外套を着ていない。これは、外套が王や貴人の表現であり、左右の人たちはその従者であることを意味しているのであろう。従者たちの衣服はみな同じで、筒袖、膝までの丈の上衣、腰にベルトを締めている（えりのかたちについては、えり部分の壁画が残っていないのでわからない）。衣服の色は隣同士で異なる配色が施され、さらに別色の縁どりが付けられている。注目すべきは体の左側に服の打合せのライン（左衽を表す）が見え、そのラインがベルトの上下で繋がっている点である。つまり、この服は打合せラインで左右に全開でき、前述した敦煌莫高窟壁画に描かれた西方系胡服に近い。

そして、この筒袖、左衽、縁取りといった特徴は、すでに述べた南壁グループの北東壁南側の2人の男性供養者像（年少の男性）の衣服と共通する。また、北壁グループのうち北西壁の従者の中に供物を持つ者があり、これらも供養者像とみてよい。南壁グループと北壁グループの従者が同一の供養者集団であるなら、北西壁男性従者と北東壁の男性2人は同じ服装である可能性が高く、北西壁男性像の下半身と北東壁男性像の上半身を合わせることで、全身の服装が復元できる。すなわち、この供養者集団の男性は、上半身に円領、筒袖、膝丈の全開の上衣を左衽に着て、えりの紐を結び、ベルトを締め、下半身はつま先が丸い長靴を履き、足首で紐を巻いて円形の留め具を付ける服装であったと推定できる。したがって北壁グループの従者たちは南壁グループと同じバクトリアの男性と推測でき、北壁グループの構成は「中央にクシャーン王、左右にバクトリアの従者たち」ということになる。

ここで、クシャーンの服装とバクトリアの服装の違いについて確認する必要がある。図25～30に示したのはすべてクシャーン時代の男性像である。この中には肩掛けを羽織るもの（図25）もあるが、中に着ている服は同じような形状と思われる。まず、上半身は円領、筒袖、膝までの丈のチュニック<sup>9</sup>をまとい、腰にベルトを締め、下半身はズボンやブーツを履く。ここまではバクトリアの服と同じである。ところが、ここで注目したいのはチュニックのえりに打合せやリボンが見えないことである（図28では左胸に幅広の四角い布が見えるが、打合せではない）。さらに、ベルトの下の襷を中央でU字形とし、縦襷を両脇に寄せ集め、両脇の裾が尖ったように長くなっている点も見逃せない。おそらくこのチュニックは脇にスリット（割れ目）がないので、脚の動きを自由にするためにこういう工夫をしているのであろう。

<sup>9</sup> チュニックは膝の辺りまでの丈の上衣を指し、今日もファッション用語として流布している。その起源は古代ローマのトゥニカ（tunica）と考えられており、打合せのない貫頭衣のような衣服で、ズボンやスカート、肩掛け、外套などを組み合わせた。男女ともに着用した日常着と思われる。



図 25 等身大の  
供養者像  
高 170 センチ  
(栗田功 1990)



図 26 花を捧げる  
供養者像  
(栗田功 1990)



図 27 ショトラック出土  
花枝を持つ供養者像  
(アラード 1968)



図 28 少年供養者  
像 ストゥッコ製  
(龍谷大学 2013)



図 29 フレスコ画 火神と供養者  
2-3 世紀 (シルクロード研究所 1993)



図 30 クシャーン時代の布絵 王と従者  
(マルジャク 2006)

図 30 は近年知られるようになったクシャーン時代の布絵<sup>10</sup>の右半部（左側が大きく欠損する）で、中央には冠を戴きマントを羽織った王（あるいは主人）が倚坐し、その後方に2人の従者が立っている。前方の従者は円領、筒袖のうす紫色のチュニックを着て、腰のあたりでV字状のベルトを締め、ズボンを穿き、つま先が丸い長靴を履いている。チュニックには金色の花文と三日月形がちりばめられ、縁取りも金色の連珠が施されている。後方の兜をかぶった従者の衣服は深い緑色で、やはり金色の花文が見られる。これら従者のチュニックの裾が横に尖ったように張り出し描かれているのも、前述したようなクシャーンの服の特徴を表しているのであろう。

以上検討したように、円領・筒袖の上衣を左衽に打ち合わせるファヤズテパの男性従者たちの服装は、クシャーンではなくバクトリアである。すなわち、北壁グループの男性には二種の服装が認められることになる。中央の人物はクシャーンの王、左右の従者たちはバクトリアである。

第8室内部の壁画は以下のように整理できる。

【南壁グループ】（南東壁～北東壁南側）3体のブッダとバクトリアの女性たちとバクトリアの男性2人

【北壁グループ】（北西壁～北東壁北側）1人のクシャーン王とバクトリアの男性従者12人

### 3. ファヤズテパB-8室の仏像と壁画について ーまとめー

以上の検討によって、石造如来三尊龕と壁画について次のようなことが判明した。

- ①石造如来坐像龕の如来像は、ファヤズテパやカラテパで発見された壁画や石彫像など、テルメズ地域の作例と造形上の共通点があり、テルメズ固有の様式が存在した。
- ②石造如来龕像の如来像は、ガンダーラ地域の中ではカーピシーの石彫像と共通点が認められる。ただし、両像は作風面での違いが大きく、製作年代の先後関係を決することはできない。
- ③北西壁の中央男性像は立ち姿や服装の特徴からクシャーンの王を表している。ただし、カニシカ1世と特定できるわけではなく、クシャーン王の雄姿を象徴的に表現していると考えられる。
- ④北西壁～北東壁北側の男性従者、北東壁南側の年少男性の服装はバクトリアの特徴があり、クシャーンではない。
- ⑤南東壁の女性供養者たちの服装はバクトリアの特徴があり、クシャーンではない。

<sup>10</sup> マルシャクはクシャーン朝支配下のバクトリアで製作されたとする（マルシャク 2006）。

田辺勝美は輪郭線の描法や綿布という材質から、北インド（マトゥラー）で製作されたと推測する（田辺 2016）。

以上のことから、ファヤズテパ B-8 室の仏像と壁画の制作年代について次のように結論する。

(1) 石造如来坐像龕はカーピシーなどカーブル周辺のガンダーラ様式を学んでいることは確実であるが、テルメズ地域の固有の表現も認められ、ガンダーラの作品と簡単に比較して年代を論じることはできない。テルメズにおいて仏教美術が隆盛したのはクシャーン統治下の2~3世紀であるから、本像もその頃とみられる。本像と壁画が一具であれば、3世紀半ば以前となる。なお、ファヤズテパでは彩色のある塑像も発見されているが、それらのふくよかでやわらかいモデリングや、高く盛り上がる肉髻などは、石造如来龕像とは隔たりが大きく、製作年代は下ると考える。

(2) 壁画の内容は、北側にクシャーン王とバクトリアの従者たち、南側に3体のブッダとバクトリアの女性供養者およびバクトリアの年少男性を描いている。よってこの部屋の寄進の主体はバクトリア人の男女で構成される世俗の供養者集団である。北西壁中央に描かれたクシャーン王像は、製作時においてバクトリア供養者集団がクシャーンの統治下にあったことを示している。ササン朝ペルシャの侵攻によって3世紀前半にはバクトリアのクシャーン朝の支配は崩れたとされており(稲葉 2018)、本壁画の年代は3世紀半ば以前と考えることができる<sup>11</sup>。

#### 4. おわりに — ロ・ムズィオの年代論への疑問 —

ロ・ムズィオは2012年に注目すべき論考を発表し、壁画の年代はササン朝によるテルメズ侵攻以降、さらに4世紀末に寺院が改装されているので(アンナエフの報告に基づいて)、壁画は4世紀末以降に描かれた可能性が高い、とした。ロ・ムズィオがそう考える根拠としてあげたいいくつかの図像上の問題はたしかに斬新であるが、さらに広い観点から検討されるべきと思う。

いま筆者は以下の2点で疑問を感じている。ロ・ムズィオは北西壁男性供養者たちの足先が隣同士で重なって描かれている表現、北東壁南側の男性が人差し指を曲げている表現、この2つの表現がササン朝美術に由来すると主張している(ロ・ムズィオ 2012, p. 200)。以下、この点について検討する。

---

<sup>11</sup> なお、北東壁の男性像の頭の上にギリシア文字の銘(現在はウズベキスタン国立歴史博物館蔵)があったと報告されており、名前の一部と考えられている。吉田豊はこの文字の書体を検討し、クシャーン時代からササン朝支配の初め頃(3世紀)と推定しており、壁画の年代を考えるうえで重要である(吉田豊「Fayaz Tepe 壁画のバクトリア語銘文の書体から見た年代比定——(付録) 中国とバクトリア・ソグド商人——」、研究セミナー「中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について:ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」(2019年10月)にて口頭発表)。本報告書の吉田論文も参照されたい。



図 31 シャープール 1 世  
戦勝記念磨崖浮彫図線図  
(ロ・ムズィオ 2012)



図 32 シャープール 1 世戦勝記念磨崖浮彫図  
(3 世紀) (ギルシュマン 1966)

まず、足先が重なる表現について、ロ・ムズィオはシャープール 1 世 (ササン朝第 2 代) の戦勝記念磨崖浮彫図 (3 世紀) の一つの区画の中の兵士 3 人の線図 (図 31) を示した。この線図を見るかぎり、たしかに 3 人の足先は重なっている。しかし、磨崖図全体 (図 32) をながめれば、他の区画内の兵士たちの足は必ずしも重なっていない。大きな磨崖浮彫図のごく一部を取り出してササン朝美術の特色というのには、いささか無理があるように思う。また、前出のクシャーン時代の布絵 (図 30) に描かれた従者 2 人も足先が重なって描かれており<sup>12</sup>、この表現がササン朝に由来するというロ・ムズィオの見解には疑問を覚える。



図 33 バフラム 2 世謁見図  
線図 (ロ・ムズィオ 2012)



図 34 ファヤズテパ  
北東壁南側の男性供養者



図 35 ファヤズテパ  
北西壁の供養者写真  
(アリバウム 1990)

<sup>12</sup> なお、田辺勝美はこの布絵の 2 人の従者の足が重なっていることについて、「クシャーン王朝美術の様式的特色とも解釈できる」と述べている (田辺 2016) が、布絵以外の「クシャーン王朝美術」の具体的な作例があるのかどうかは述べていない。

次に、指を曲げる表現について、ロ・ムズィオはこの表現は尊敬や服従の意味があるとし、バフラム2世（ササン朝第5代）謁見図レリーフ（3世紀）の、向かって左側の従者2人の線図（図33）を示し、人差し指を曲げる表現もササン朝に起源すると考えた。指を曲げる表現はたしかに示唆的で、ササン朝美術においては特別な意味があると思われる。

しかし、ファヤズテパの壁画で人差し指を曲げるのは北東壁南側の男性（図34）（おそらく年少者）のみで、しかも、指の曲げ方が微妙に異なる。前方の男性は人差し指を曲げていると言うより、立てていると言うべきで、後ろの男性の人差し指は指先のかたちがはっきりしない。また、手の位置も、バフラム2世謁見図では顔の前まで手を挙げているが、ファヤズテパ壁画の2人の手は胸の位置である。はたして両者は同じ意味を表しているといえるのであろうか。

ロ・ムズィオがいう「王に対する敬意や服従」は北東壁南側の年少の2人より、北西壁～北東壁北側のクシャーーン王に従う従者たちにこそ表現されるべきかと思うが、残存する部分では数名の従者がベルトのあたりで何かを持って供養している<sup>13</sup>ようである（図35）。であるなら、北東壁南側の2人もブッダに供養している姿と見るのが妥当ではないだろうか。北東壁南側の2人にササン朝の影響があるとする意見には賛同しかねる。

以上、ロ・ムズィオのササン影響を前提とする年代観には容易に受け入れがたい問題があることを指摘した。ファヤズテパの貴重な仏教遺物については、壁画の保存修復作業が完了し、公開される日が待たれるが、材料や技法を含めたさらなる研究成果を期待したい。

#### 【付記】

本稿は、2019年10月29日に奈良文化財研究所で開催された「第4回国際遺跡研究セミナー 中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」において口頭発表した内容をまとめたものである。本研究を進めるにあたって、影山悦子氏より参考文献や貴重な参考写真など、多大なご教示とご指導をいただいた。また、挿図3-2～4は岡田健氏よりご提供いただいた。各位に深く感謝いたします。

---

<sup>13</sup> この持物は、壁画剥ぎ取り前の写真（図35）では、袋の上部を縛った巾着のような形に見え、アリバウムは「贈り物」とする。



【参考文献】(図版を転載したものを含む) 刊行年順

- ・ロマン・ギルシュマン (Ghirshman, R.) (岡谷公二訳)『人類の美術 古代イランの美術II』、新潮社、1966。
- ・アラード (Hallade, M.) , “GANDHARAN ARTS OF NORTH INDIA and the Greco-Buddhist Tradition in India, Persia, and Central Asia”, 1968.
- ・L.I.アリバウム (加藤九祚訳)『古代サマルカンドの壁画』文化出版局、1980。
- ・樋口隆康編『BAMIYAN』(京都大学中央アジア学術調査報告)、同朋舎出版、1983。
- ・奈良県立美術館『シルクロード・オアシスと草原の道』(シルクロード大文明展図録)、1988。
- ・栗田功『ガンダーラ美術 I・II』、二玄社、1988年・1990。
- ・アリバウム (Альбаум, Л. И.) , Живопись святилища Фаязтепа // Г. А. Пугаченкова (ред.), Культура Среднего Востока: Изобразительное прикладное искусство, Ташкент, 1990.
- ・“CULTURE AND ART OF ANCIENT UZBEKISTAN”, Exhibition catalogue, Volume 1, Moscow, 1991.
- ・フランシーヌ・ティッソ (前田龍彦・佐野満里子訳)『GANDHARA/図説ガンダーラ — 異文化交流地域の生活と風俗—』、東京美術、1993。
- ・シルクロード研究所『シルクロードのみほとけたち』展覧会図録、1993。
- ・小谷仲男『ガンダーラ美術とクシャン王朝』、同朋舎出版、1996。
- ・東京国立博物館編『シルクロード大美術展』(東京都美術館で開催)展覧会図録、1996。
- ・加藤九祚「中央アジア北部の仏教遺跡の研究」『シルクロード学研究』4、1997。
- ・中川原育子「クチャ地域の供養者像に関する考察 —キジルにおける供養者像の展開を中心に—」(『名古屋大学文学部研究論集 135・哲学 45』、1999。
- ・田辺勝美・前田耕作編『世界美術大全集 東洋編 15 中央アジア』小学館、1999。
- ・田辺勝美・松島英子編『世界美術大全集 東洋編 16 西アジア』小学館、2000。
- ・肥塚隆・宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 13 インド (1)』小学館、2000。
- ・東京藝術大学『平山郁夫コレクション ガンダーラとシルクロードの美術』展覧会図録、2000。
- ・岡田健・劉永増編集『敦煌石窟 莫高窟第二八五窟』、文化出版局、2001。
- ・加藤九祚・ピダエフ (Pidaev, Sh.) 編・著『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版、2002。
- ・宮治昭「バクトリアにおける歴史の興亡と仏教美術の誕生」(同上所収、2002)。
- ・東京国立博物館『パキスタン・ガンダーラ彫刻』展覧会図録、2002。
- ・東京藝術大学大学美術館『アフガニスタン文化財復興支援 アフガニスタン 悠久の歴史展』展覧会図録、2002。
- ・平山郁夫シルクロード美術館『新館開館一周年記念 ガンダーラ—仏像のふるさと—』2009。
- ・マルシャク (Marshak, B.) , “Une peinture kouchane sur toile” (avec une note additionnelle par Frantz Grenet), *Comptes Rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres* 150/2, 2006.

- ・石松日奈子「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』131、2010。
- ・石松日奈子・中川原育子・影山悦子『古代中国をとりまく胡漢諸民族の服飾に関する調査研究』（文部科学省委託 服飾文化共同研究拠点事業報告（文化学園大学）、2012。
- ・影山悦子「4～8世紀のバクトリアとソグディアナの服飾」（同上所収、2012）。
- ・ロ・ムズィオ（Lo Muzio, C.）, “Remarks on the paintings from the Buddhist monastery of Fayaz Tepe (Southern Uzbekistan)”, *Bulletin of the Asia Institute* 22 (2008), 2012.
- ・龍谷大学龍谷ミュージアム『特別展 平山郁夫 悠久のシルクロード』、2013。
- ・石松日奈子「供養者像 一図像による寄進銘一」『仏教美術論集 第5巻 機能論』、竹林舎、2014。
- ・内記理「ガンダーラ紀年銘彫刻の製作年代」『美術史』176、2014。
- ・九州国立博物館・東京国立博物館『黄金のアフガニスタン』 展覧会図録、2016。
- ・田辺勝美「フヴィシュカ王と臣下を描いた綿布画 一現存するインド最古の布絵の蓋然性をめぐって」『國華』1447、2016。
- ・田辺勝美「スルフ・コータル出土「カニシュカ1世像」の神格化について —木蔦と再生復活と神格化—」『シルクロード研究』9・10、創価大学シルクロード研究センター、2017。
- ・影山悦子・M.A.レウトヴァ（Marina A. Reutova）「ウズベキスタン南部ファヤズテパ仏教遺跡出土壁画について」『2017年度シルクロード学研究会報告集』、2017。
- ・ウズベキスタン国立歴史博物館編『ウズベキスタンの遺宝』（タシュケント）、2018。
- ・安田治樹「カラ・テペ新出の壁画 一東トルキスタン遺存作例との比較から一」（立正大学ウズベキスタン学術調査隊『カラ・テペ遺跡 一2017年度調査概要報告書』所収）、2018。
- ・稲葉穰「オアシス都市の発展 一古代～前期モンゴル期：西トルキスタン」（小松久男・荒川正晴・岡洋樹（編）『中央ユーラシア史研究入門』所収）、2018。
- ・ピダエフ（Sh.Pidaev）（加藤九祚・今村栄一訳）『ウズベキスタンの仏教文化遺産』、六一書房、2019。
- ・立正大学ウズベキスタン学術調査隊『カラ・テペ テルメズの仏教遺跡』（立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクトシリーズ2）、六一書房、2020。
- ・影山悦子・M.A.レウトヴァ・K.アブドゥルラエフ編『ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究』、名古屋大学人文学研究科・名古屋大学高等研究院、2021。
- ・田村朋美・柳成焜・M.A.レウトヴァ「ファヤズテパ遺跡出土壁画の自然科学的調査」（同上所収、2021）。



# ファヤズテパ壁画に添えられたバクトリア語銘文の 書体による年代判定および関連する問題について

吉田 豊

## 0. はじめに

ずいぶん以前に影山さんからここで問題になっている壁画と銘文を見せて頂いた時に、銘文の書体はバクトリア語表記の草書体のギリシア文字としては非常に古いという印象を持ち、そのように伝えたことがあった。その印象は、田辺勝美・前田耕作（編）『世界美術大全集』東洋編 15 中央アジア、東京 1999: pl. 155 で提示されている、2～4 世紀というこの壁画の年代比定とも一致している。後に影山さんから、当該壁画の年代については、より遅い時代に比定する説も提案されていることを知らされ、その上で、改めて書体の年代について筆者の考えを発表するように依頼された。その依頼を受けて、2019 年 10 月 29 日、奈良文化財研究所において「Fayaz Tepe 壁画のバクトリア語銘文の書体から見た年代比定 —— (付録) 中国とバクトリア・ソグド商人——」という発表を行った。この研究ノートでは、主にその時の研究発表の内容と、その後気づいた事柄についてまとめる。

## 1. バクトリア語とバクトリア語を表記する文字

バクトリアとは、現在のアフガニスタン北部にあるバルフを中心にした地域であって、アケメネス朝では 1 州を形成していた。この地域は後にトカリスタンと呼ばれるようになった。漢文資料では吐火羅（『隋書』、『旧唐書』、『新唐書』）、吐呼羅（『魏書』、『北史』）、覩貨邏（『大唐西域記』）と表記されている。そこで話されていたバクトリア語はイラン系の言語であり、ソグド語やコレズム語、コータン語などとともに東方言の中世語に分類され、現在は死語となっている。残された資料は紀元後 2 世紀から 9 世紀に及んでいる。

他のイラン系の言語とは異なり、バクトリア語はギリシア文字によって表記される。その始まりはクシャーン朝最盛期の王カニシカの時代とされ、彼の貨幣において、銘文の言語はギリシア語からギリシア文字表記のバクトリア語に代わった。カニシカが製作させたラバータク碑文にはカニシカ紀元の 1 年（紀元後 127/8 年）の始まりと、ギリシア語からバクトリア語（碑文ではアーリア語と呼んでいる）を使うことが明言されている（Sims-Williams 2012: 77）。ただ実際にはそれ以前からギリシア文字によるバクトリア語表記は始まっていて、カニシカの祖父に当たるヴェーマ・タクトの碑文（紀元後 104/5 年）も知られている（Sims-Williams 2012: 76-77）。カニシカがこの言語をクシャーン朝の公用語としたことによって、王朝滅亡後も、ガンダーラをも含めた旧クシャーン朝の領土で使われることになった。

バクトリア語を表記するギリシア文字（これ以降「バクトリア文字」と呼ぶ）は、通常のギリシア文字 24 文字に、[Ϸ]の発音を表すための新たな 1 文字を加えて、25 文字から成り立っている。玄奘は「字源二十五言。轉而相生。用之備物。書以横讀自左向右。（TT. vol. 51, 872a17-18）」<sup>1</sup>と云うが、正確な観察である。書体には銘文体（monumental script）と草書体（cursive script）がある。銘文体はクシャーン朝時代の碑文類に限定され、クシャーン朝滅亡以降は銘文類にも草書体の文字が使われた。草書体の文字で刻まれた印章の文字は、大量の草書体で書かれた文書が 1990 年代に入って発見される以前には、エフタル文字とも呼ばれていた。ドイツのトルファン探検隊が 20 世紀の初めにトルファンで発見した紙に書かれた文書も、長い間 Berliner Hephthaliten-Fragmente 「（ベルリンの）エフタル文書」と呼ばれていた（Humbach 1966: 120-36）。

草書体の文字は時と共に草書化が進み、銘文体との乖離が著しくなり、いくつかの文字や文字の組み合わせでは、各文字の認定が極めて困難になった。実際、印章や貨幣の銘文のような、いびつな面や狭いスペースに刻まれた短文の銘文は、確実な読みに至ることは非常に困難で、研究者ごとに読みが異なることは珍しくない。實際上、この種の草書体の文字で表記されたバクトリア語の文書や銘文は、1990 年代から知られるようになった大量のバクトリア語文書を、文字通り一人で解説・発表してきた N. Sims-Williams しか解説できないと言っても過言ではない<sup>2</sup>。

## 2. 書体の変化と資料の年代比定およびファヤズテパ壁画の銘文の年代

草書体のバクトリア語の書体から年代比定する試みも、Sims-Williams によって組織的に行われている。彼は 150 点あまりのバクトリア語文書で紀年がない写本の年代を、年代が分かっている書体や言語の特徴から推定する基準を提示している（Sims-Williams and de Blois 2018: 53-59）。年代が分かっているバクトリア語文書のなかで最古のものは、西暦 332 年の結婚の契約文書（文書 A）で、最も新しい文書（文書 Y）は 771 年に書かれている。幸い文書は、この間にほぼまんべんなく分布しているので、書体の変化を比較的によく観察できるようだ。ただファヤズテパの壁画の銘文の書体について考察する際には、この基準はかならずしも利用できない。というのは、この銘文は 332 年以前に書かれている可能性が高いからである。これらの文書に基づく Sims-Williams のこの貴重な研究は、当

---

<sup>1</sup> 水谷真成の日本語訳は「字のなりたちは二十五言であり、[それが組み合わせあって] 次第に [語彙・文章が] できこれを用いて必要に備えている。書は横読みをし、左から右に向かう」とある（水谷 1971: 33）。「轉而相生」はソグド文字の場合も同じで、アルファベット式の音素文字を用いて文を書く方式を説明しているらしい。水谷はソグド文字の場合は「それが組み合わせあって [語彙が] でき、その方法が次第にひろがって [文を記して] いる」としている。

<sup>2</sup> これらの文書についての Sims-Williams の研究書は以下の 3 冊である：Sims-Williams 2007, 2012a, 2012b。文書発見の経緯や資料の価値については、文書の組織的発表に先立って発表した小冊子が今なお非常に有益である：Sims-Williams (1997；熊本裕による日本語訳もある)。この改訂版は 2012 年に出版されている（Hansen ed. 2012: 95-114）。

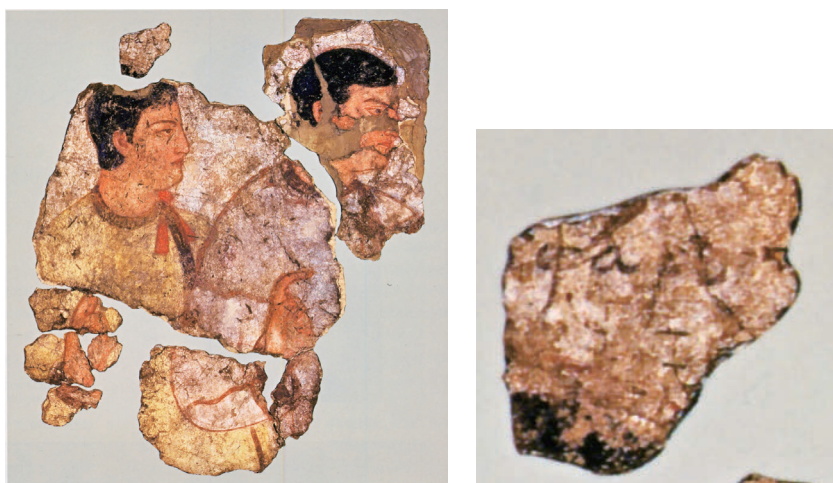
該の資料が4世紀以降のどの時代のものかどうかの判断には使えるが、それ以前の書体には適用できないからである。

とは言え、利用価値がないわけではない。例えば筆者との個人的な意見交換の中で、F. Grenet 教授はエフタル時代の貴族の衣装の特徴として、肩の所に短いリボンがついていることに注目し、ファヤズテパの男性供養人の衣装にもそれが見られることに注目していると伝えられたことがある<sup>3</sup>。つまり、ファヤズテパの壁画をエフタル時代に比定できる可能性は排除できないと考えておられるようだが、その場合は、5世紀後半から6世紀にかけてのエフタル期の書体とファヤズテパの銘文の書体を比較して、このような推測の妥当性を検証することができる。

## 2-1. ファヤズテパの銘文の特徴

それではファヤズテパの銘文を見てみよう：図1。一般に  $\varphi\alpha\rho\sigma$  と読まれていてその読みには問題はない。ただ現在入手できる写真では最後の文字  $\sigma$  は壁面の汚れのせいで曖昧に見える。直前の  $\rho$  もいくらか曖昧になっている。文字  $\varphi$  では、中央は横向きの卵形（向かって左がやや大きめ）であって横転した数字の8形（つまり二つの円形を横に連ねた形）にはなっていない。その中央を上下に貫く垂線はわずかに左側に開いた円弧形だが、ほぼ直線と言えるだろう。垂線の下端は確認できるが、上端は破損して確認できない。しかしこの文字の字形のプロポーシオンから判断して、ほぼ上端近くまで残っていると考えられるだろう。 $\alpha$  はローマ字の筆記体の  $a$  によく似ている。上述したように  $\rho$  はやや模糊としてはいるが、頭部の円形とその左側から下に延びる垂線は確認できる。 $\varphi$  の上端と下端、 $\rho$  の場合は下端になんらくねり、屈曲、ハネが見られないことは、書体を考える上で重要な点である。

図1：ファヤズテパ壁画と後方の人物の頭上の銘文（田辺・前田 1999, pl. 155）



<sup>3</sup> エフタル期の衣装のこの特徴についてはグルネ (2020: 78)を参照されたい。

Sims-Williams の研究では、文字  $\varphi$  の書体変化の年代比定の目安として以下の 3 点が指摘されている。

- $\varphi$ 1. 垂線は直線か若干カーブした線で、下端に突起や鉤形が見られない特徴：年代が比定できる文書では西暦 470 年以降のものには在証されない。
- $\varphi$ 2. 基準線より上方に延びる垂線が存在しない：この特徴は年代が分かっている文書では 475（あるいは 465）年のものにはしか見られない<sup>4</sup>。
- $\varphi$ 3. 垂線の上端に突起やくねりが見られる：485 年以前の文書には見られない。

ファヤズテパの  $\varphi$  には、この 3 つの特徴の中では  $\varphi$ 1 を適用できるが、それはこの銘文が 470 年以前であることを示すことになり、いわゆるエフタル期の銘文ではないことを示すであろう<sup>5</sup>。

Sims-Williams の書体による年代比定の研究では、文字  $\alpha$  も文字  $o$  も取り上げられていない。これらは、文字  $\delta$  も含めて合流し基本的には単なる円形になる。ただ  $o$  は、後続する文字と続け書きされないという特徴で  $\alpha$  と  $\delta$  から区別される<sup>6</sup>。

次に文字  $\rho$  の書体変化の年代比定の目安としては、以下の一つの点が指摘されているだけである。

- $\rho$ 1. 垂線は直線か若干カーブした線で下端に突起やくねりが見られない特徴：年代が比定できる文書では西暦 466 年以降のものには在証されない。

これをファヤズテパの  $\rho$  に適用すれば、この銘文が 466 年以前であることを示すことになり、上記の  $\varphi$ 1 同様いわゆるエフタル期の銘文ではないことを示すであろう。

以上、Sims-Williams の研究に従えば、ファヤズテパの銘文が 466 年以前であることが示されるが、それ以上の年代の特定はできない。ただエフタルの盛時である 6 世紀前半のものではあり得ないことは確実である。

---

<sup>4</sup> サマルカンドの印章にはこの書体の  $\varphi$  が見られる (Sims-Williams et al. 2006: 130)。筆者はこの年代基準案が提出される以前に、この封泥が Kashmir Smast すなわち Swat 地方で見つかったことの歴史的な背景を考えた上で、5 世紀後半に比定していた (吉田 2014)。筆者のこの年代比定を Ching が補強している (Ching 2020: 54-55)。

<sup>5</sup>  $\varphi$ 3 も適用できるが、こちらは 485 年以前であることを示すことになるので、 $\varphi$ 1 の基準より特定性が低い。

<sup>6</sup> 後期のテキストでは、特定の語や環境で  $\delta$  は特異な形で書かれることがあり、それを Sims-Williams は  $\Delta$  で転写している (Sims-Williams 2007: 38-39)。またまれに特異な形で書かれる  $\alpha$  もあり、Sims-Williams は A で転写している (Sims-Williams 2012b: 27, n. 1)。書体の変化の中で、これらのバリエーションが何を意味しているのか筆者には分からない。

## 2-2. 初期の草書体の書体とファヤズテパの銘文

それでは、ファヤズテパの銘文の年代についてこれ以上のことは分からないのであろうか。筆者がこの銘文を見たときに得た「古い」という印象は、何に所以しているのであろうか。

バクトリア文字の最初期の草書体の銘文は、ファヤズテパもそこに含まれる、ウズベキスタンのカラテペ遺跡と周辺の仏教寺院遺跡で発掘される土器の銘文に見られる。遺跡の最古層はササン朝の侵攻以前、クシャーン朝の時期に属するとみられる。この場合筆者が注目するのは文字 φ の中央の卵形の形式である。銘文体では、卵形あるいは楕円形を書いて、その中央に垂線を書いている：図 2。一方で、最晩期の文書である文書 Y における形式を見ると、この部分は横転した数字の 8 形（以下では「横転 8 形」と呼ぶ）、ないしは二つの円が分離したためがね形になっている：図 3。ただこの文字 φ の中央部の卵形から横転 8 形への変化は、上記の Sims-Williams の書体の変化に関する研究では注目されていない。その理由は、当該の変化が、中央がくびれたピーナツ形を挟んで漸進的なものであり、突起や鉤型の有無のような書体の違いを区別する明瞭な基準が見つかりにくいことがあげられるだろう。また卵形やピーナツ形が、わずかながら遅い時期の文書に散見することもあるだろう。その一方で、古い時代の文書 A に見られる古い字形と、文書 Y に見られる新しい字形を比べると、その差異は歴然としている。文書 Y では φ は 4 例見られるが、すべて横転 8 形であり、文書 A では 25 例の φ が見られるが、すべて横転 8 形になっていない<sup>7</sup>。大半は卵形（図 4）であるが、ごく一部で中央にわずかにくびれがみられ、ピーナツ形（図 5）になっているように見える。これは中央の垂線の左右を別々に書くことに由来していると考えられるが、その特徴は既にカラテパの陶器の銘文にも確認できる：図 6。なお垂線の下端に右上方に向かって「ハネ」が見られる文字は、文書 A の 25 文字中 20 文字である<sup>8</sup>。

図 2：銘文体の φ



Rabatak 碑文



Surkh Kotal 碑文

図 3：文書 Y の φ



図 4：文書 A の卵形の φ



12 行



35 行

<sup>7</sup> その観点から、φ4 として、「横転 8 形は 332 年以前には現れない」という基準を提案できるかもしれない。

<sup>8</sup> つまり、すべての文字 φ が同じ特徴を有しているのではない。なお、この「ハネ」の有無は、垂線の下端が次の行の文字と重なっている場合には、モノクロの写真では必ずしも正しく確認できないことがある。



図5：文書Aのピーナツ形のφ



21行

17行

図6：カラテパの陶片のφ



(左右の半円を別々に書く)

銘文体では卵形になっているので、ファヤズテパの銘文のφは銘文体のφに近似していることになり、筆者の「古風である」という印象はそこから来ていたのであろう。ちなみに草書体の文字で年代が判明している最古のものは、西暦265/6年に年代比定されるSengulの銀皿であり（Sims-Williams 2013: 192-95）、そこには3例のφが見られるが、すべて垂線の左右で半円が別々に書かれている：図7。また3例中2例では垂線の下端には短い「ハネ」が見られる。この中央の楕円部分の形状の違いを重要視すれば、ファヤズテパの銘文は265/6年以前に年代比定することも許されよう。またカラテパ遺跡出土の陶片の銘文のφの中に既に、中央の垂線の左右の半円を別々に書くことが見られるものがあるから、その特徴が見られないファヤズテパの銘文は、この種の草書体の中では最古層に属し、クシャーン朝時代に比定することも無理ではないように思う。

このことと関連して想起されるのは、ロンドンのA. Saedi コレクションの銀器の銘文である（Sims-Williams 2013: 197）。この銘文にはκαραλαγγο「辺境侯」という称号が見られるが、対応する中世ペルシア語形はκαναραγγοであって、ここではバクトリア語本来の形式が使われていることになる。解読者のSims-Williamsは、そのことからこの銘文がササン朝初期、あるいはクシャーン朝期に年代比定できる可能性を指摘している。この銘文に1例見られる文字φは、中央部がピーナツ形になっている一方で、垂線は直線に近く、下端にも上端にも屈曲や「ハネ」は見られない。また、印象論ではあるが、この銘文のαにはファヤズテパの銘文のそれと酷似しているものがある：図8<sup>9</sup>。そしてその点では銘文体のαとも似ている：図9。

図7：Sengulの銀器のφ

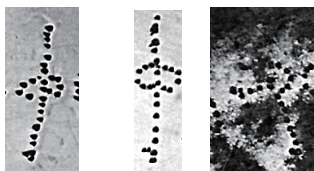


図8：Saediコレクションの銀器の-φαρδαρο



<sup>9</sup> 図8の-φαρδαροの最初のαに注目されたい。ただこれは真に印象論であって、Saediコレクションの銘文の文字を刻した職人にとって、αとδがどれほど異なっていたのかの判断は微妙である。

図9：銘文体の  $\alpha$



Rabatak



Surkh Kotal

### 2-3. 銘文の解釈

ファヤズテパの壁画の発見者たちは、当初この銘文の  $\varphi\alpha\rho\sigma$  は神格名であると考えていたようだ。ところで  $\varphi\alpha\rho\sigma$  という神格名には  $\varphi\alpha\rho\rho\sigma$  というバリエーションがあり、語源的に見れば  $\varphi\alpha\rho\rho\sigma$  が古い形式であった (Sims-Williams 2007: 274b)。無論この点だけから、本銘文が神格名ではないことを示すことはできないであろう。筆者が注目するのは、 $\varphi\alpha\rho\sigma$  の左側にある直前の破損部にわずかながら文字の痕跡が残っていることである。また  $\varphi\alpha\rho\sigma$  に後続する右側の部分も破損していて、そこに文字列がなかったとは言えない。要するに、この銘文が  $\varphi\alpha\rho\sigma$  単独ではなく、より長い銘文であった可能性がある。その場合、 $\varphi\alpha\rho\sigma$  という形式には神格名以外に2通りの解釈が可能である。一つは前置詞  $\varphi\alpha\rho\sigma$  「～の為に」と解釈し、寄進の対象を意味する語に添えられていると解釈するものである。もう一つは  $\varphi\alpha\rho\sigma$  「栄光」<sup>10</sup>で終わる人名の一部とみなすものである。Sims-Williams (2010)によるバクトリア語の人名研究を検索すれば、 $\varphi\alpha\rho\sigma$  で終わる人名は8例在証されていて、そのうちの  $\beta\alpha\varphi\alpha\rho\sigma$  はラバタク碑文に現れており、古くからこの  $-\varphi\alpha\rho\sigma$  の形式で在証されていることが知られる<sup>11</sup>。ファヤズテパの銘文では  $\varphi$  の前に短い空白があるから、直前の文字は後続の文字と接続しない  $\sigma$  のような文字である可能性が高い。実際  $\varphi\alpha\rho\sigma$  を後分とする人名はほとんど  $\mu\alpha\nu\sigma\varphi\alpha\rho\sigma$  のように、直前の文字は  $\sigma$  になっている。常識的な判断から、筆者は、この銘文は  $\varphi\alpha\rho\sigma$  で終わる人名の可能性が高いだろうと考えている。

### 2-4. まとめ

以上の考察によって、筆者の考えをまとめる。ファヤズテパ壁画のバクトリア語銘文  $\varphi\alpha\rho\sigma$  は、主に文字  $\varphi$  が、銘文体に非常に近く、後の草書体に見られるようになる特徴を全く示さないこと、さらに文字  $\alpha$  が銘文体の雰囲気を残しているという点で、クシャーーン時代からササン朝の初期に年代比定できると筆者は考えた<sup>12</sup>。この語の前に短い空白をはさんで文字の残画が見えるので、全体はもう少し長い銘文であった可能性が高く、筆者は、 $\varphi\alpha\rho\sigma$  で終わる人名がそこに書かれていたのではないかと推定した。わずか4文字から成る短い単語に見られる書体に基づいた年代推定はきわめて危うく、この推定を根拠にしてさ

<sup>10</sup> これは神格名の  $\varphi\alpha\rho\sigma$  と同じ語源である。

<sup>11</sup> というよりむしろ、古代イラン語に遡る人名要素なのである。

<sup>12</sup> これがそもそも、ファヤズテパ壁画銘文が「古い」という筆者の印象の背景にあったのであろう。

らに別の議論を展開することはできないだろう。それでも、何らかの傍証としては使えるのではないかと期待している。

### 3. バクトリア文字に見られる書体の変化について

上でも述べたように、バクトリア文字の草書体の字形は確実に変化している。Sims-Williams は、それを紀年のない文書の年代比定に利用する基準を周到な手続きで提案している。その際、「古風」とか「やや新しい」と言った印象論を排除し、文書の時代の上限や下限の絶対年代を提示するために、ほとんどの場合、垂線の下端に見られる鉤形のような外見上の顕著な特徴が、最も早く現れる、あるいは最も遅くまで残る年代を基準にしていることは注目される<sup>13</sup>。

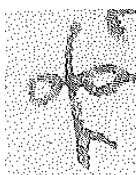
#### 3-1. 文字 φ の場合

このような方針を採用した結果として、文字 φ の中央部が、卵形から中央がくびれたピーナッツ形、相似記号形 (∞) 、そして横転 8 形 (ときに左右の円形が離れてめがね形にもなる) という特徴や、基準線より下方の垂線が、上方のそれに比べて短くなり、ずんぐりした印象を与えるという特徴は考慮されることがなかった：図 10。そして、特定の文字の特定の特徴の有無は、一つの文書に現れる当該文字のすべての事例で確認できるわけではないことにも注意を払う必要がある。例えば上でも述べたように、最も古い文書である文書 A に現れる文字 φ は 25 例存在する。そのうち垂線の下端の「ハネ」は 20 文字に見られるが、残りの 5 例では確認できないのであった。Sims-Williams は、この「ハネ」が見られないという特徴は 470 年の文書まで確認できるとしている。

図 10 : φ の書体のバリエント



相似記号形  
文書 cj 1 行



めがね形  
文書 li 11 行



横転 8 形～めがね形  
文書 R19 行

今ここで、中央の部分が卵形かピーナッツ形か、横転 8 形 (さらにめがね形) かを基準にして、その分布を見てみよう。Sims-Williams の *Bactrian documents*, vol. I と vol. II に収録された文書で見る限り、大半は横転 8 形であり、7 世紀以降の文書には顕著なめがね形が

<sup>13</sup> しかし例えば文字 β の場合、β1, 2, 4 は基準線より上方の文字の体幹が直立しているか、前方あるいは後方に傾くかなど、必ずしも特徴の有無とは言えない、いわば程度の差が基準になっている場合もある。

見られる文書がある。年代が特定できる文書では最古の、文書 A の場合、全 25 例の文字  $\varphi$  には横転 8 形は全く見られない。卵形とピーナツ形が混在するように見えるが、両者の区別は時に難しい。これに対して、これ以降の文書で年代が確定している文書 Aa (357 年) では文字  $\varphi$  は在証されないが、次に古い文書 B (359 年) では、在証される 2 例はすべて横転 8 形である。まとまった事例が回収できる文書 C (380 年) の封印された文書と、封印されていない方の文書を合わせて、32 例の文字  $\varphi$  が見つかるが、横転 8 形が大半で (図 11)、卵形かピーナツ形に分類できるのは 6~8 例である (図 12)<sup>14</sup>。Sims-Williams の  $\varphi_1$  の基準にあるように、470 年以降はすべての文字  $\varphi$  に垂線の下端に鉤形が見られるようになるが、その特徴のある字形では、基準線より下の部分が、基準線より上の部分に比べて短くなっており、それ以前の字形に比べてずんぐりした印象を与えることは上でも述べた。

図 11 : 文書 C の横転 8 形



2 行

5 行

図 12 : 文書 C の卵・ピーナツ形



9 行

### 3-2. 文字 $\chi$ の場合

文字  $\varphi$  の中央部の形の違いと同様に、バクトリア文字の個々の字形に際だった外見の違いが見られる事例で、不思議に Sims-Williams が取り上げていないのは文字  $\chi$  であろう。Sims-Williams (2013) 論文で扱われた銀器の銘文では、no. 2, no. 3, no. 4 (Sengul の銀器で 265/266 年), no. 5, no. 6 に文字  $\chi$  は見られるが、no. 3 以外ではすべてローマ字の x に似た形をしている一方で (図 13)、no. 3 の  $\chi$  だけは、ローマ字の小文字の h の鏡像ようになっていて、しかも垂線の上端は右下方に向かう「ハネ」が見られる (図 14)。そして全体は左右に対して上下が長くなっていて、背が高いスリムな印象を与える。つまり、古い書体の  $\chi$  では左上方から右下方に延びる傾斜が 45 度ほどの斜線が、この字形ではいくらか左に傾斜するがほぼ垂直になる一方で、全体として、もう一方のストロークに比べて長くなり、結果として背が高くなっている。また本来右上から左下に延びていたストロークは、左下から一端垂直に延び、後に 90 度右に折れるようになっている。折れ曲がるのは、垂線の中間より下か中間である。

<sup>14</sup> いくつかの事例では、横転 8 形との区別が難しいことから、このような数字になっている。

図 13 : Sims-Williams 2013 の no. 2, 4, 5, 6 の  $\chi$ o

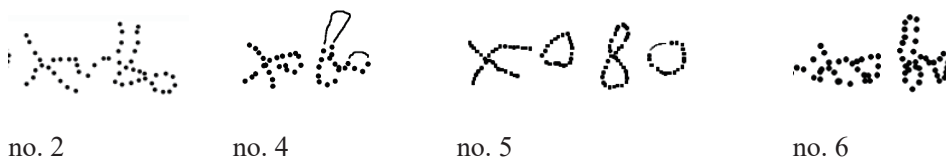


図 14 : Sims-Williams 2013, no. 3 の  $\chi$ (o)

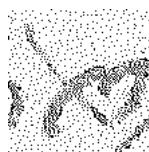


このスリムな字形の  $\chi$  の鏡像形は、年代が特定できる文書では 517 年に書かれた文書 J から顕著に現れ (図 15)、その後の文書では多少の揺れはあるものの基本的にこの字形で書かれている。文書 J 以前で年代が特定できるのは 483 年に書かれた文書 I と Ii で、そこでは文字  $\chi$  の事例は多くないが、古い形式のバリエーション形である : 図 16。文字  $\chi$  の字形のこの違いは、西暦 500 年頃を挟んでそれより以前か、それ以降かの基準としては有効なように思われる<sup>15</sup>。ただ、先端部の鉤形のような明瞭な特徴の有無ではないので、一種の印象論のようにも見えるのである。しかし、森安が数十年来提唱しているウイグル文字の 4 書体 (楷書、半楷書、半草書、草書) による年代推定は、これと類似の印象論になっているものの、一定の有効性が経験的に確認されているから、バクトリア語を表記する草書体の文字についてもある程度適用できるであろうと考える<sup>16</sup>。

図 15 : 文書 J の  $\chi$  (すべて以下の形)



図 16 : 文書 I, Ii の  $\chi$



文書 Ii 9 行

<sup>15</sup> この時期はエフタルの全盛時代以前と以後ということになるが、そのこととの関係は明らかではない。なお、年代が特定されていない文書の書体のなかで、Sims-Williams の基準では xj (465 頃)、eh (485 頃) とされる文書に  $\chi$  の鏡像形の  $\chi$  が現れていて、筆者が想定する年代と齟齬しているように見える。この 2 点に限られることを積極的に評価するか、逆に筆者の基準の信頼性を低くするとみるかは、今後の検討が必要であろう。

<sup>16</sup> 森安 (1994: 66) から、彼の半楷書体の説明の一部を引用してみよう : 「半楷書体 (nearly calligraphic) は、楷書体ほどには整然としておらず、字間も密につまっていないが、楷書体より力強い感じの書体。個々の文字の形は楷書体に近く、アレフと T (特に語頭) の歯は左上がり、W の輪は左上方向にやや角張って突出し、P・K の背中は丸みが無く右下に落ち込んでいる。楷書体も個々の綴りが左上がり、右下がりの傾向を持っているが、半楷書体ではこのベクトルがより顕著になっている。」

また、文字  $\varphi$  の中央部の形式の違いは、卵形からピーナツ形に、そして横転 8 形へと一挙に変化するのではなく、新しい字形で書かれる事例が相対的に増えるようになっていて、新旧の字形が一つの文書に混在することになっている。言語変化の場合も、新旧の言語形式や特徴が同時代の言語に共存し、時代と共に古い形式が淘汰されるという変化を経ることが知られている。しかもその変化は S カーブ形で、最初は徐々に進行するが、一定期間を過ぎると一気に新しい形式が増える。その一方で古い形式の方は、生起数はわずかながら、比較的遅くまで存続するという性質があることが指摘されている。この知見を書体の変化に適用すれば、Sims-Williams が判断基準として利用するような書体の特徴の完全な消失は、全体的な趨勢の変化よりもかなり遅れて発生することが予想される。つまり Sims-Williams が利用する基準で文書の年代幅を推定した場合、文書全体から得られる新旧の印象とは必ずしも一致しない場合があることになる。一種の統計的なアプローチが有効な所以である<sup>17</sup>。

ローマ字の x 形から変化の過程で、ローマ字の h の鏡像形になる以前にはいくつかの変種が見られるが、その一つは 380 年の紀年のある文書 C に見られる。それは左上から右下へのストロークが左下方に向かって開く半円・円弧のように見える字形である：図 17。これは大文字の E の鏡像のようにも見える<sup>18</sup>。ちなみに、Sims-Williams and de Blois (2018: 81-84) が作成した文書を年代順に並べたリストでは、文書 J の直前にあるのは文書 xq であるが、その文書の  $\chi$  は、古いローマ字の x 形の字形と h の鏡像形の中間的な形になっている：図 18。この字形では、左上から右下への斜めのストロークはそのまま、本来は右上から左下に向かっていたストロークの右半分が下方に屈曲して、全体は右下方に開いた半円ないしは丸みを帯びた直角、すなわち h の鏡像形の  $\chi$  のそれに似た形になる<sup>19</sup>。

図 17：文書 C の  $\chi$



13 行

図 18：文書 xq の  $\chi$



8 行

<sup>17</sup> 碑文や文書のような、一定の字数のある文字資料に見られる一つの文字の字形の新旧のばらつきを統計的に見て、当該文字資料の相対年代の判断に用いるという試みを、内記 (2020) はカラーシュティエ文字資料で試みていて非常に参考になる。内記によれば、統計を用いて相対年代を探るこのような手法は、土器の編年に用いられるのだという (内記 2020: 29)。

<sup>18</sup> 最近発表された 757 年の紀年のある Jaghori 岩壁碑文の特異な  $\chi$  はこのタイプであろう。この碑文を発表した Sims-Williams (2020-2021: 68) は数学の記号である  $\exists$  に似ているとしている。

<sup>19</sup> 文字  $\chi$  の場合は、既に銘文体の Rabatak 碑文と Surkh Kotal 碑文でも微妙な違いが見られる：図 19。

図 19：銘文体の  $\chi$ bovo にみられる文字  $\chi$  のバリエント



Rabatak

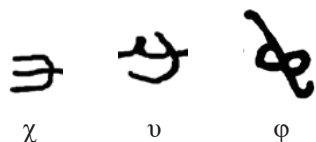


Surkh Kotal

### 3-3. Jaghori 岸壁銘文の特殊性

ヒンドゥークシュの南の Jaghori で見つかった岩壁碑文は、最近 Sims-Williams (2020-2021)によって発表された。この 757 年の紀年のある碑文は、書体の変化を考える上では大きな問題を提起する。従来バクトリア語文書が書かれた場所として、Rob, Samingan, Kadagstan, Gozgan, Warnu, Khesh が知られていた (Sims-Williams and de Blois 2018: 82)。しかし地方的な書体は確認されてこなかったため、書体の地域的変種の存在は想定されてこなかった<sup>20</sup>。しかるに Jaghori 碑文は、上で論じた文字  $\chi$  (図 20) 以外にも非常に特異な特徴を示している。最も奇妙なのは、Sims-Williams も指摘する文字  $\upsilon$  で、Sims-Williams and de Blois (2018: 58)で提案された基準によれば、475 年以降の文書には見られない特徴である、基準線より上の部分が上向きに開いた半円・円弧になっている字形が、この碑文には見られることである：図 20。奇妙なハート形をした文字  $\beta$  や、文字  $\rho$  の下方へ向かうはずの垂線が右方向に水平に延びる特徴なども特筆される (Sims-Williams 2020-2021: 69-70)。文字  $\phi$  では、中央の円形が垂線の左右が別々に書かれるだけでなく、左側が右側より少し高い位置に書かれている：図 20。この相似記号 ( $\infty$ ) のように見える奇妙な特徴は、465 年頃に書かれたとされる文書 cj に顕著に見られた：図 10。これらは、碑文が書かれた年代より数百年前のバクトリア語文書の特徴の一部を残していることになるので、Jaghori の岸壁銘文を書いた書記である Bagis の個人的な書体とみなすことも出来ないように思われる。それにしても、これ以外の広い地域に分布しているバクトリア文字が比較的均質であることを考慮すれば、主流から外れた傍流、あるいは書体の地域的変種とみなすことも躊躇される。謎である。

図 20：Jaghori の  $\chi$ ,  $\upsilon$ ,  $\phi$



<sup>20</sup> ただ上述した  $\Delta$  に関して、Guzgan の文書に頻繁に見られることは指摘されている。しかし、それも Guzgan だけに見られるわけではないという (Sims-Williams 2007: 38)。

### 3-4. まとめ

このセクションでは、バクトリア語表記のギリシア文字の書体の変化を研究する際の問題点を、文字  $\phi$  と文字  $\chi$  の字形の変化に着目しながら論じてみた。文字  $\phi$  の中央部が楕円ないしは卵形から横転 8 字形、あるいははめがね形になる変化は、極めて顕著であるにもかかわらず、Sims-Williams の書体による年代比定の基準になっていない。これは、文字の外見的特徴の有無と、その特徴を持つ文字が一つの文書内の変異形として 1 例も見つからなくなるという、2 種類の完全な「有無」を基準にしていることがその背景にあるように思われる。文字  $\chi$  の場合、ローマ字の x 形とローマ字の h の鏡像形の 2 種類とその中間形が見られ、その 2 種類の違いは非常に顕著である。しかしこれもまた Sims-Williams が提案する指標には含まれていない。この字形の変化は、中間形をはさんだ漸進的な変化で、特徴の有無として捕捉することが困難であることが、ここでもその背景にあるように思われる。これは印象論を排除して、絶対年代を指定しようとするところから必然的に導かれるアプローチであったのであろう。

筆者は、字形に見られるこの 2 種類の完全な有無に着目することによってではなく、森安がウイグル文字の書体の変化を大きく 4 段階に分類したような、大雑把な印象による分類もある程度有意義ではないかと考える。また内記がカローシュティー文字銘文の年代比定に用いた、新旧の字形のばらつきを統計的に見てみる手法もまた有意義ではないかと考える。いずれにせよ、たとえ印象論に過ぎないという批判はあったとしても、文字  $\phi$  や文字  $\chi$  に見られる字形の明白な変化を文書の年代判定に取り込む方略が必要なように思う<sup>21</sup>。

## 4. バクトリア語資料についてのいくつかの覚え書き

以上でファヤズテパの銘文と関連する問題についての議論を終える。以下では、バクトリア語資料について筆者が気づいた雑多な事柄を、箇条書き風に短い覚え書きとして提示しておく。

### 4-1. 中国で見つかるバクトリア語資料

現在の中華人民共和国の領内では、何点かのバクトリア語資料が見つかっている。これらはほとんど、その写真が発表されていて初歩的な転写は行われたが<sup>22</sup>、いずれも大量のバクトリア語文書の発見・解読以前の研究で、下に述べる 3 点を除けば、信頼がおける解読には至っていない。残念ながら筆者も読み解くことはできないが、書体や体裁の面から歴史的な意義を探りたい。中華人民共和国の資料は、中国本土と新疆ウイグル自治区

<sup>21</sup> ただことバクトリア語文書に関して言えば、書体によらなくても、紀年や文書に在証される人名の研究 (prosopography) や内容の検討によって、多くの場合、大枠の年代は推定できるという事情がある。年代の分からない文書が多数存在するウイグル語文献や、信頼できる紀年が得られないカローシュティー文字銘文とは事情が全く異なっているのも事実である。

<sup>22</sup> その研究は Davary (1982) にまとめられていて便利である。



で発見されたものに分類される。新疆で見つかった資料には Pelliot の発見にかかる文書断片と、同じく Pelliot が発見したスバシ寺院遺跡の壁面に書かれた落書きがあるが、両者とも未発表である。クチャのスバシ寺院遺跡の落書きは、ギメ美術館旧蔵の古い写真に見られる<sup>23</sup>。文書断片もクチャ出土で、トカラ語資料のなかに紛れこんでいるらしい (Pinault 2007: 188)。残念ながらこれらは実見できていないので、書体の判断はできない。

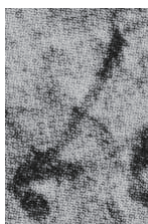
#### (a) スタインが楼蘭で発見した草書体の紙文書

A. Stein, *Innermost Asia*, vol. 1: 216 によれば、スタインは楼蘭の LA.II.x.018 の地点でバクトリア語の断片を発見したらしい。この近くからは、いわゆる「古代書簡」に匹敵するほど古風な書体で書かれたソグド語の手紙が発見されている (Sims-Williams 2020)。これに対応するように、ソグド人 (粟特胡) に関して、「建興十八年 (330) 三月十七日粟特胡楼 [] / 一万石錢二百」 (林梅村 1985: no. 13) という内容の木簡も発見されている。ソグド語の手紙もこの木簡も、4 世紀前半に、この付近でソグド商人が活動していたことと関連する文書であろう (ヴェシエール 2019: 56)。最近になって楼蘭国時代のニヤ遺跡から、やはり古代書簡に匹敵する古さのソグド語の手紙の断片が出土した (Bi Bo and Sims-Williams 2018)。そしてニヤ遺跡の西晋時代の漢文木簡に「月氏國胡」が現れるものが 2 点知られている。一つは「月支國胡支柱年四十九中人黒色 []」 (林梅村 1985: no. 673)、もう一点には「月支國胡」とある (林梅村 1985: no. 699)。この時代、粟特胡と月支國胡は同じような活動をしていたように見える。

楼蘭遺跡で出土した文書は小断片で内容は全く不明だが、4 行目に見られる文字 ε は (図 21)、Sims-Williams の書体の基準の ε1 に一致している。その基準は、基準線より上方のストロークは右上方に真っ直ぐ伸びる長い線になり、基準線より下方のストロークは右下方に短く突き出しているといものである。この基準に合致する字形は 420 年以前の文書にしか見られないという。従ってこのバクトリア文書は、ソグド語の手紙と同時代であったと推定される。つまり楼蘭のバクトリア語の断片は、そのようなバクトリア商人のシルクロード上の活動を反映しているのであろう。ソグド語に借用された商業用語の研究から、実際は、バクトリア商人の方がソグド商人より先輩格であったことが知られている (ヴェシエール 2019: 24-26; Yoshida 2021)。シルクロード交易の歴史の文脈でこの文書が取り上げられることがないので、注意を喚起しておきたい。

<sup>23</sup> 筆者は以前に、橘堂晃一氏のご好意でこれらの写真資料を見る機会があった。ただその時はクチャ地区のソグド語銘文を探している時のことで (吉田 2020)、バクトリア語の銘文の書体の分析をする知識も余裕もなかった。

図 21：楼蘭出土文書の ε



#### (b) ベルリンのトルファン出土資料

これらとは別に新疆からは、トルファンでドイツの探検隊によって発見された紙文書の断片が知られている。上でも述べたように従来 Berliner Hephthaliten-Fragmente 「(ベルリンの) エフタル文書」と呼ばれていて、7点(高昌故城出土3点、トヨク出土4点)見つかった。そして、大量の世俗文書が発見される以前の段階で、それらの草書体の文字についての研究が行われていた(Sims-Williams 2004: 325)。20年ほど前に、筆者がもう1点(実際には、紙の貼り付け部分で接合できる2断片: So 14835a, So 14860)を発見した。出土地点を示す記号(T II Y 9 = So 14860; T II Y 58 = So 14835a)から交河故城(Yarkhoto)出土であることが知られる。読み解かれた語彙から、それらの文書は宗教、おそらく仏教にかかわる内容であることが推定されている(Sims-Williams 2004: 331)。これらはどれも裏面が空白か二次利用されており、1点(MB1)には罫線と界線が確認されるので、中国で作られた新品の写経用紙を使っていた可能性が高い<sup>24</sup>。ソグド語仏典に見られる類似の状況を考慮すれば、バクトリア語で書かれた卷子本の仏典であった可能性が考えられよう。

この文書を研究した Sims-Williams (2004)は、言語的な特徴から700年以降の時代に年代比定されることを指摘している<sup>25</sup>。他の文書でも、φやχの書体は上で見た新しい時代の特徴を備えていて、この判断と何ら矛盾しない。仏典であるとすれば、ソグド語仏典と同様、中国にいたバクトリア人、おそらくバクトリア商人が書写した仏典ということであろう。ここで問題にしたいのは、写本の体裁である。筆者が発見し Sims-Williams が研究した文書は、二次利用されていた。このバクトリア語の文書と漢文仏典(『大正大蔵経』no. 1331, vol. 21, p. 534b18-c1)を、文字が書かれた面を内側にして貼り合わせ、両面が白紙の料紙を作成し、その片面(バクトリア語の写本の裏)にソグド語仏典を書写している<sup>26</sup>。

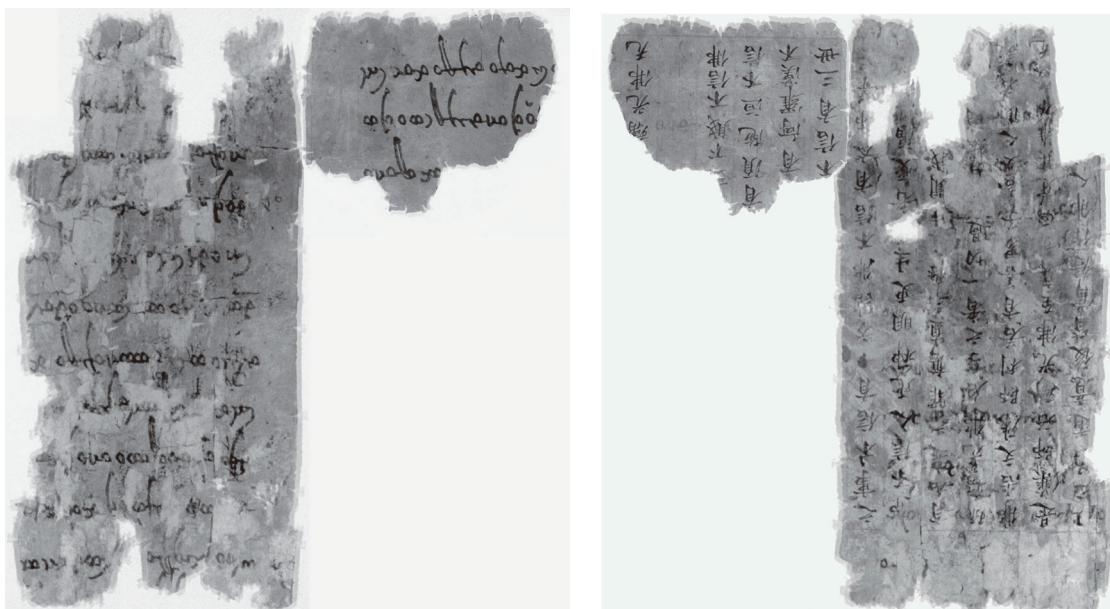
<sup>24</sup> MB1で確認される罫線は、卷子本の長い辺にそって引かれているように見えるので、漢文仏典を書くための罫線ではないようだ。つまりバクトリア語のテキストを書くための罫線と界線であったようだ。

<sup>25</sup> 問題の語は σαχονο「語、事柄」であって、σαχοανοの新しい形式である。Sims-Williams (2004: 328)は、これは文書X(750年)だけに見られるという。また Sims-Williams and de Blois (2018: 60, criterion 3)によれば、-χοα->-χο-の変化は700年以前の文献にはみられないという。

<sup>26</sup> ソグド語仏典の方は草書体で9-10世紀頃と考えられ、推定されたバクトリア語文書の年代と矛盾しない。この仏典については Reck (2014: 205-6)参照。付録でテキストを校訂しておいた。MB1の場合も裏面はソグド語仏典を書写するために再利用しているが、文字を書く方向は

後にソグド語面の裏（実際には漢文仏典の裏）に草書体のウイグル語仏典が書かれている。漢文仏典の方は卷子本であったはずなので、バクトリア語の文書の方も卷子本だったと考えられる。ただバクトリア語の方は、行の配列が漢文の行と直角の方向で書写されている。そして料紙の接合部分を境界にして左右に行末と、行頭のマージンが確認できる：図 22。これらを総合すると、このバクトリア語の卷子本は、卷子本の始まりから末尾まで短い辺に沿って行を連ねていく、漢文やソグド語の卷子本のタイプではなく、料紙ごとに、長い辺に沿って行を進めていき、そうしてできたコラムを横に貼りついでいく、ちょうど敦煌出土のチベット語の『無量寿宗要経』（図 23）のような作りになっていたのではないかと推測される。チベット語の『無量寿宗要経』の写本では、一つの料紙に 2 コラムを書いているが、バクトリア語の場合も同じだったのではないかと考えられる。

図 22 : 14860 = T II Y 58 + 14835a



90度回転している。この場合もバクトリア語のほうは、チベット語の『無量寿宗要経』と同じような体裁の写本だったらしい。

図 23：チベット語訳『無量寿宗要経』：京都国立博物館（2009: no. 96）より



筆者のこのような一連の推定が正しかつたとして、これらのバクトリア語仏典を作成していたのはどのような集団であったのかは興味深い問題である。この仏典を作った唐の時代のバクトリア商人はソグド商人の「縮小版」で独立した集団であったか、広義のソグド商人にバクトリア出身の人々も含まれていたか、二つの可能性があるように思う。実質は同じように見えるが、史料に現れる羅姓の商人たちが何らソグド人と変わらないという観察は<sup>27</sup>、後者の可能性を支持するのではないかと筆者は考えている。その背景には、7～8世紀になるとソグドの商業圏がバクトリア方面にも及んでいたことが挙げられよう<sup>28</sup>。この点については、吉田（2013: 61-62）、宮本（2020）も参照せよ。ヒンドウークシュの南の貨幣に見られるソグド語の銘文とソグドの商業圏との関連については下記も参照せよ。

### (c) 銀器の銘文 1

筆者が知る限り、中国国内ではバクトリア語の銘文のある銀器は2点知られている。幸いどちらも Sims-Williams によって読みと解釈が提出されている。2つともごく短い銘文である。

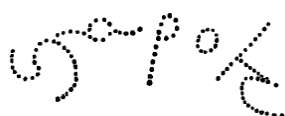
1点は1988年甘肅省靖遠県北灘郷で発見された銀製の皿で、美術史の研究者たちによれば、3世紀頃の北アフリカあるいは西アジアのローマの職人によるという。銘文は  $\nu\alpha\rho\circ\eta'$  と読まれ、「重量178（スタテル）」と訳される（Sims-Williams 2013: 191）：図24。全体の重量は3,180gで、それから換算された1スタテルの重量は17.865g、またそれから導き出されるドラクマの重量は4.466gであるという。そしてそのドラクマの価は、ペンジケントで出土する石の分銅から導き出される平均値と同じであるともいう。ドラクマ

<sup>27</sup> 中国におけるバクトリア商人や羅姓のバクトリア人に関しては、福島(2017: 225-59)、福島(2018)を参照せよ。

<sup>28</sup> 西突厥の可汗の指示により、玄奘をカピシまで送り届けたのはソグド人であったと推定されるが、そのことは、ソグドの商業圏の広がりを反映しているのかもしれない。

の価から年代の比定は難しいようだが、文字  $\upsilon$  は、基準線より上方が上開きの半円に近く、Sims-Williams の基準では、この特徴は 475 年まで確認できるという。つまりエフタル以前ということになる。ただ  $\upsilon$  は文字列  $\upsilon\alpha$  に含まれ、その文字列は重量を意味する  $\upsilon\alpha\gamma\gamma\omicron$  の省略形で、一種の記号として古い字形で存続した可能性も高く、銘文の年代比定には使えないのかもしれない。

図 24：甘肅省の銀製の皿の銘文：Sims-Williams (2013: 191, fig. 1) より

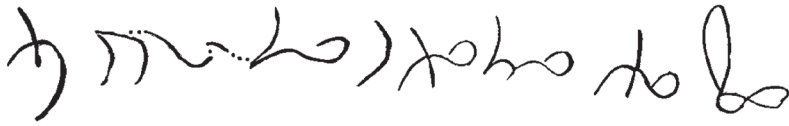


#### (d) 銀器の銘文 2

二つ目は 1970 年、大同市で発掘された八曲銀杯である。その裏側に 1 行バクトリア語の銘文があり (図 25)、Sims-Williams は、当初提供された不鮮明な写真をもとに読みと解釈を提案した。その読みの  $\chi\gamma\gamma\iota\omicron\iota\chi\omicron\iota\chi\omicron[\chi\omicron]\beta\omicron$  は展覧会の展示録 (*China: Dawn of a Golden Age, 200-750 A. D.*, New York, 2004: 151, no. 61) に発表されている。後に、より鮮明な写真を参考に当初の読みを放棄して、新たに  $\chi\gamma\gamma\iota\omicron\iota\chi\omicron\eta\omicron\chi\omicron\beta\omicron$  「キングラ王の所有 (物)」と読んでいる (Sims-Williams and Tucker 2006: 589)<sup>29</sup>。なお展示目録では 5 世紀と年代比定している。ここには文字  $\chi$  が 3 例見られるので、書体変化の点からは興味深い。この文字  $\chi$  の最初の 2 例では、本来左上から右下へ延びるストロークがやや左に傾斜しており、ローマ字  $x$  形に近い。上で見た文書 Ii (483 年) の  $\chi$  (図 16) や  $xq$  のそれ (図 18) に似ている。3 番目のものはそれが直立してローマ字  $h$  の鏡像形に近いが、垂線の上端にくねりは見られないので、最初の 2 例の字形が全体として時計回りに 20~30 度回転したように見える。銀器の湾曲した面に書き込まれていることを考慮すべきなのだろう。このタイプの字形は 5 世紀後半の文書に見られる傾向があり、展示目録の年代比定と矛盾しない。とりわけ北魏が 439 年に北涼を滅ぼし、そこから遺民 3 万余家を 493 年まで北魏の都であった大同に移住させると、北魏と西域との関係が深まり、西域の使節が多く大同を訪れることになったことと、この銀器の存在との関連は一般に認められている通りである (王銀田 2006: 71)。

<sup>29</sup> 銘文の描き起こし図や、あまり鮮明ではないが発表されている写真を見れば、筆者には  $\chi\gamma\gamma\iota\omicron$  より  $\chi\gamma\gamma\alpha\omicron$  の読みが支持されるように見える。ちなみに古くは林梅村の依頼によって W. Sundermann がこの銘文を読んでいた (林梅村 1997: 59-60)。彼は最後の語  $\chi\omicron\beta\omicron$  を正しく読んでいるが、直前の語を  $\chi\omicron\beta\omicron/\chi\alpha\beta\omicron$  と読んでいた。これは、明らかに Sundermann に提供された描き起こし図に問題があったのであった。

図 25 : 大同の八曲銀杯の銘文 : Sims-Williams and Tucker (2006: 589, fig. 2) より



5 世紀後半の西域由来の器物に施されたバクトリア語銘文に  $\chi\eta\gamma\gamma\iota\lambda\omicron$  王が見られることから、この王は 493/4 年に比定されている Schøyen コレクションの銅板銘文（吉田 2013: 59）に言及される Khingila 王と同一人物である可能性がある。また『旧唐書』巻 198「罽賓國」にある次の記事（特に下線部）との関連も示唆するであろう：

貞觀十一年、遣使獻名馬、太宗嘉其誠款、賜以繪彩。十六年、又遣使獻褥特鼠、喙尖而尾赤、能食蛇、有被蛇螫者、鼠輒嗅而尿之、其瘡立愈。顯慶三（658）年、訪其國俗、云「王始祖馨孽、至今曷擯支、父子傳位、已十二代。」其年、改其城為修鮮都督府。龍朔初、授其王修鮮等十一州諸軍事兼修鮮都督。（英訳は Ching 2020: 103-7 にある）

ここに言う「馨孽」は、この地域の王の名称にしばしば見られる要素で、ブラーフミー文字では Khingila と表記される名前と同じ原語を写しているだけでなく、時代的に考えて Schøyen コレクションの銅板銘文の Khingila と同一人物であろう<sup>30</sup>。この記事は、658 年に朝貢してきた罽賓國の王である曷擯支の使者の言葉である。この記録から、Khingila/ $\chi\eta\gamma\gamma\iota\lambda\omicron$  はその王朝の初代の王で、その名前が後世の王の人名要素（eponym）になったことが理解される。658 年の段階で 12 代以前というのは曖昧だが、仮に 1 代を 15 年程度だとすると、480 年頃が想定され、上での推定と矛盾しない。つまりこの銀器の  $\chi\eta\gamma\gamma\iota\lambda\omicron$  はまさにこの初代の馨孽その人を指していた可能性がある<sup>31</sup>。

<sup>30</sup> ただこの名前を帯びる人物は、この地域では複数記録されているので（桑山 2001 : 138 ; Inaba apud Ching 2020: 106-7）、実際には事態はそれほど単純ではない。

<sup>31</sup> 罽賓から北魏への朝貢は 451 年と 453 年に記録がある（『魏書』「世祖紀下」；「高宗紀」）。その時の朝貢がこの初代の馨孽からだとするれば、1 代は 20 年ほどになる。ただその場合は、年代差の観点から Schøyen コレクションの Khingila と同一人物とは考えにくいだろう。また北魏への朝貢の際に、自分の所有者銘文を添えた銀器を献上品にするとは考えにくいのではないだろうか。むしろ、 $\chi\eta\gamma\gamma\iota\lambda\omicron$  から寄進を受けた罽賓の寺院や神殿が、寄進された金品を運用する過程でこの銀杯も交易品として流通していたのではないかと思う。寺院の財物を商人が運用していたことを示す興味深い証拠に、森安が引用する仏教徒のウイグル商人ウトレットによる懺悔文がある。そこには以下のように述べてある：「私ウトレットが、前世より現世にいたるまで、寺院や僧房や清浄な場所で、（中略）寺院に属する財物を取って運用して、そのお返し（報酬）を与えなかったのならば、…」（森安 2020: 168）。ソグド商人による寺院などの資産運用については拙稿も参照せよ（Yoshida 2021）。ナナ女神（の神殿）に、銀器を寄進するシーンは最近サマルカンド近郊の Kafir kala 遺跡で発掘された、エフタル時代の木彫のレリーフにも認められる（グルネ 2020: 70）。5 世紀頃のタシケントの支配者が寄進した銀椀が、ササンの銀貨や他の器物と共に広東で発見された（吉田 1995: 79-83）。これらの寄進物が運用され、商品・交易品として流通していたことを示すであろう。

筆者は、ここの曷撻支 (Karlgren の中古音 \*γât yiet tsię) は 714 年の紀年のある Tang-i Safedak 碑文で (Sims-Williams and Lee 2003)、仏塔を寄進したという銘文を残した αλχισο と同じ人名だと考える (吉田 2013: 62)。年代の差異から考えて、同一人物ではあり得ず、祖父と孫の関係であろう。この地域では祖父と孫が同じ名前を帯びることはよく知られている (Sims-Williams 2020-2021: 68)。下でも述べるように 714 年頃には、罽賓國の領域はいわゆる Turk Shah が支配者になっていた。その時の王は漢文史料では烏散特勤灑 (tgyn' hwr's'n MLKA テギン・ホラーサーン・シャー) という名前であった (稲葉 2010: 9-10)。その場合 714 年に Tang-i Safedak で仏塔を寄進した孫の αλχισο はどういう立場にあったのであろうか。Tang-i Safedak はバーミヤーンのさらに西の比較的へんぴな場所にあることを考慮すると、祖父の曷撻支 (= αλχισο) 以降に台頭してきたハラジュ突厥の一派が罽賓國の支配者になり、古い王家は周辺に追いやられたのではないだろうか。銘文に「大食と突厥が支配する時代」に言及していることも納得できる。注目されるのは Sims-Williams and Lee (2003: 166) が提案する αλχισο の語源で、それによれば αλχισο は Alkhan すなわち αλχανο の指小形であるという。このことは、αλχανο と χιγγιλο の間の関係の傍証になるだろう<sup>32</sup>。

Sims-Williams and Lee (2003: 166-67)は、碑文の中で γαζανο の王と呼ばれている αλχισο は Ghazni の王であり、この時代 Zabulistan を支配していた Turk Shah の一人であると論じている。Sims-Williams は発音の類似性をもとに γαζανο を Ghazni に比定しているが、筆者にはその根拠はそれほど強いとは思えない<sup>33</sup>。筆者自身は αλχισο が曷撻支の音写であることと、罽賓の支配者である曷撻支は、658 年の段階では Turk Shah の一人とは考えられないという理由から、Sims-Williams and Lee の説は採用しない。もちろん、αλχισο=曷撻支という前提が成立しない、あるいは受け入れないという立場に立てば、およそ筆者の議論は成り立たない<sup>34</sup>。

<sup>32</sup> ヒンドウークシュの南のいわゆるフン系の支配者の貨幣には、Alkhan 貨幣以外に牛頭冠の Nezak 貨幣も知られている。『隋書』で漕国 (ザーブル) の王が牛頭冠であるというように (桑山 2001: 138-39)、このパフラビー文字の銘文をもつ貨幣はザーブルの支配者が発行していた。ササン朝の南東領域である Sistan に接して領土を保持したこの集団の支配者が、貨幣にもつぱらパフラビー文字を使うことはその関連で理解できる。一方で何故特異な牛頭冠を持つかは不明である。筆者はザーブルの近くにあったゾロアスター教の名刹 Karkuy が、雄牛の角のような形をしていたこと (Schippmann 1971: 37-45, esp. 38-39) と関連するのではないかと考えている。

<sup>33</sup> Alram (2018: 13)によれば、稲葉も γαζανο を Ghazni に比定することに否定的で、「Gaz の人々の」という意味に解釈している。

<sup>34</sup> 桑山 (2001: 133)は曷撻支の原語を Ghar-ilchi と再建している。ilchi は古代トルコ語の elçi/ilçi 「使者」を想定しているに違いない。実際に「撻」と同音の「頡」が古代トルコ語の el を転写している例は知られている (Kasai 2014: 74)。しかし、この種の系統不明の言語の人名を漢字音写から再建することは非常に難しい。実際、頡=el の例でも、漢語の軟口蓋の摩擦音 (\*γ-) が、古代トルコ語の初頭の母音を表記していて不可解であるが、初頭母音に声門閉鎖を伴う言語と、そうではない言語の場合があり、声門閉鎖音を持っていた当時の漢語側が、声門閉鎖を持たない言語の初頭母音をどのように転写するかは簡単には予測できない。そのようなわけ

#### 4-2. チュルク系の支配者の貨幣のバクトリア語銘文の読みについて

この雑多な内容の覚え書きの最後に最近筆者の目にとまった貨幣のバクトリア語銘文に関して気づいたことを記しておくことにする。

##### (a) ザーブルのイルテベル？

上では罽賓のフン系の王朝が Turk Shah に交代することについて述べた。このトルコ系の支配者はハラジュ突厥であったことが論証されている (Yoshida 2003; 稲葉 2004)。玄奘の時代にはガズナとカピシの間の山中にいた目立たない存在であったハラジュ突厥は、7世紀の後半には、ザーブルとカピシの在地の王に仕える武装集団から、ついには在地の王に取って代わったのであった。ザーブルとカピシの王家は血縁関係にあったことも知られている。ハラジュはバクトリア語文書では  $\chi\alpha\lambda\alpha\sigma\omicron$  (すなわち Khalach) と表記される。貨幣では *kharalāca*、漢文資料では、罽賓の場合「葛羅達支」、ザーブル (謝颺) では「訶達羅支、葛達羅支」のように1音節多い名称になっているが、それは独特の疑似梵語化した形式とみなされよう (Yoshida 2003)。なおどちらの王もイルテベルの称号も帯びていた<sup>35</sup>。とりわけザーブルの王は有名で、イスラム史料では *rutbil* と呼ばれていたことはよく知られている (Sims-Williams and Lee 2003: 166)。この称号は各言語では、漢文：頡利發，Skt.: *hitivira*, Bactr.:  $\omicron\lambda\iota\tau\omicron\beta\eta\pi\omicron$  と表記されている。

最近発表された Turk Shah のコイン (Type 314A : 図 26) に草書体のバクトリア語の銘文があり、Sims-Williams は  $\chi\alpha\delta\omicron/\lambda\gamma\omicron/\iota\alpha\rho\omicron/\omicron\lambda\iota\tau\omicron/\beta\eta\pi\omicron$  と読んでいる (Vondrovec 2014: 637)。草書体の文字では  $\alpha$  と  $\omicron$  の区別は後続の文字と接続するかどうかだけなので、行末に立つときは両者の区別はあいまいになる。また  $\gamma$  と  $\sigma$  はよく似た形の小さい文字で、垂線部分のわずかな湾曲の有無でかろうじて区別できる<sup>36</sup>。要するに筆者は  $\chi\alpha\delta\omicron/\lambda\gamma\omicron$  を  $\chi\alpha\delta\alpha/\lambda\alpha\sigma\omicron$  と読んで、「訶達羅支、葛達羅支」と同一視することを提案しようと思っているのである。 $\iota\alpha\rho\omicron$  はこの支配者の名前だったのであろう<sup>37</sup>。

で、一種の「勘」による筆者の推定が正しいことを証明することもできないが、否定することもできないだろう。

<sup>35</sup> 罽賓の王の場合は NumH 208 の銘文から知られる (参考図 1) : Skt. *śrī hitivira kharalāva parameśvara śrī śāhi tigina deva kārita*, ‘His perfection Itābār of Khalaj, devotee of the highest divinity, the perfect(?) King, the Sahi Tegin Lord had made this [coin]’ (Vondrovec 2014: 656)。ザーブルの支配者の場合は、アラビア語史料以外に、『新唐書』の記事から「頡利發」という称号を帯びていたことが知られる。なお、Yoshida (2003: 156-57; Sims-Williams 2007: 277a) は *kharalāva* を *kharalāca* と読み、「葛羅達支」などと同様  $\chi\alpha\lambda\alpha\sigma\omicron$  の疑似梵語形と考えたのであった。そしてそれが Turk Shah がハラジュ突厥であったとする、その後の認識の出発点であったので、Vondrovec が “Khalaj” と翻訳しながら *kharalāva* と転写するのは不可解である。

<sup>36</sup> 筆者との電子メールのやりとりの中で、この点について Sims-Williams 教授は、わずかな屈曲が見られるので、 $\sigma$  より  $\gamma$  の読みが支持されるが、差異は微細で  $\sigma$  の読みは排除できないとされた。ちなみにバクトリア文字の  $\sigma$  には [s] 以外に破擦音 [ts, tʃ] の音価もあった。

<sup>37</sup> 8世紀の悟空が、カシミールにあったと報告している、突厥が建造した也里特勤寺 (稲葉



なお、このコインの裏面の5時の位置にソグド語の銘文 *prn* 「栄光、王権」が見える<sup>38</sup>。なぜソグド語の *prn* がこの地域の貨幣に見られるのかについては、別に議論する必要がある。この点については下記も参照されたい。

図 26 : Type 314A (Vondrovec 2014: 637)



5h *prn*

図 27 : Type 259 (Vondrovec 2014: 683)

図 28 : Type 295A (Vondrovec 2014: 435)



9h βγγ, 3h *prn*



3h *prn*

#### (b) 罽賓の拂菻罽婆の貨幣の銘文

Turk Shah の一人である罽賓の拂菻罽婆王の名前はバクトリア語の銘文では φρομο κησαρο と表記される (Humbach 1966: 20-22 ; 稲葉 2010: 173)。「婆」は「娑」の誤写である。彼の王位の継承をめぐる事情は『旧唐書』の以下の記事で有名である。

〈罽賓國〉開元七年（719）、遣使來朝、進天文經一夾、祕要方并蕃藥等物、詔遣冊其王為葛羅達支特勒。二十七年（739）、其王烏散特勒灑以年老、上表請以子拂菻罽婆嗣位、許之、仍降使冊命。天寶四年（745）、又冊

2010: 160) の「也里」は *iarvo* [yarn] に微妙に似ている。

<sup>38</sup> Vondrovec (2014: 637) は、裏面に銘文は存在しないとしているが誤りである。Vondrovec は、他でもソグド文字の銘文 (*prn* や βγγ) を読むことができていない (Vondrovec 2014: 683 Type 259 = 図 27; 435 Type 295A = 図 28)。これはソグド商人の影響を正しく理解できていないことを意味していて、極めて遺憾である。

其子勃匐準為襲罽賓及烏菴國王、仍授左驍衛將軍。（『旧唐書』198, p. 5309）（英訳は Ching 2020: 103-7 にある）

彼が発行したササン式の銀貨の表裏の周囲に追刻<sup>39</sup>した長いバクトリア語の銘文には、当時対立していた ταζιανο「大食人たち、イスラム勢力」という語が含まれていて、極めてプロパガンダ性の高い銘文である。やはりこの草書体の銘文も、Sims-Williams (2009: 123-27)による研究が発表されるに及んで、ようやく信頼のおける読みに到達したと言える。

さてその銘文であるが、Sims-Williams は以下のように解読した（参考図 2）：

表：φρομο κησαρο<sup>sic</sup> βαγο χοδδηο κιδαβο ταζιανο χαστο

裏：οδο σαρβο σαβατο ασο μιο βογδινδο

“表：Frum Kēsar, the noble lord, who \*smote the Arabs /裏：and \*thereby saved...”

φρομο κησαρο がイスラム勢力を打破したことを記念するメッセージであることがよく分かる。一種の勝利記念硬貨とも言えようか。

Sims-Williams は訳文の中の smote にはアステリスクを添えて、その解釈が確実では無いことを示しているように見えるが、それは従来この動詞の現在語幹 (χαλ-) だけしか在証されていないことと関係している。しかし \*χαστ- は期待される過去語幹であるだけでなく、バクトリア語の動詞 χαλ- には「打撃を加える、打破する」の意味が確認されている。従ってそのアステリスクが示唆する解釈の不確実性は、大きな問題にはならない。その一方で裏面の σαρβο σαβατο は意味がよく分からない表現であることと、ασο μιο「原義：これ/このものから」を thereby と翻訳し、単に文脈の結束性を高める漠然とした機能を果たす指示表現と解釈した上で、アステリスクを添えて、その解釈に一定の留保が必要だと考えていることが示されている。

筆者自身は、σαρβο σαβατο を梵語の sarvasattva「一切衆生」からの借用語とみなし、ασο μιο の μιο「これ」は、イスラムの侵攻という苦境を意味すると解釈した。全体は「神のごとき王である拂菻罽婆、その者<sup>40</sup>は大食軍を打破し、一切衆生をこの境遇から救済した」というほどの意味になるであろう。しかしこれには解釈面での問題はないが、語形面で問題がある。sarvabuddha が σαρβοβοδδο と表記されているので (Sims-Williams 2007: 262b)、σαρβο には問題は無い。その一方で sattva では、余剰の母音以外に子音の転移を認めなければならない。しかもバクトリア語に借用された bodhisattva は βωδοσατφο のよう

<sup>39</sup> 後に論じるカウンターマークを含め、既存の打刻貨幣に新たに文字や記号、図案を打刻することを「追刻」と表現する。これは津村眞輝子氏の考案した表現である。

<sup>40</sup> これは関係代名詞 κιδο の翻訳である。関係文は日本語では後続する文の連帯修飾句として表現しなければならないが、翻訳に表裏の順番を反映させられないために、ここでは敢えてこのように訳しておいた。正しくは「大食軍を打破し、一切衆生をこの（境遇）から救済した神のごとき王である拂菻罽婆」のように翻訳される。

に表記されているから、ここでも  $\sigma\alpha\tau\phi\omicron$  が期待される<sup>41</sup>。ただ bodhisattva のような音節構造の語を、例えばソグド語やウイグル語で借用に際して語末の母音を脱落させて発音する場合、発音しづらい bodisatv が bodisavt のように発音されることが見られるので<sup>42</sup>、この場合もそのような転移が起きたことも想像される<sup>43</sup>。また、 $\beta\omega\delta\omicron\sigma\alpha\tau\phi\omicron$  が在証される文書 za は、書体の形式から判断してこの貨幣の銘文より 300 年ほど前の文書なので<sup>44</sup>、その間にあった梵語との言語接触の実態の変化も考慮しなければならないだろう<sup>45</sup>。

その一方でこのような発音上の差異の問題にもかかわらず、その類似性は否定できないと思われる。筆者はむしろ、Turk Shah が熱心な仏教徒であった側面に注目する。726 年にこの地を訪れた慧超は、罽賓に関して「國人大敬信三寶。足寺足僧。百姓家各絲造寺。供養三寶。」（『大正大藏經』51 卷 977c）と報告し、親戚関係にあったザールブルの王に関して「雖是突厥。極敬三寶。足寺足僧。行大乘法。」（『大正大藏經』51 卷 978a）とも言っている。イスラム軍との戦争には、宗教戦争の意味合いも認めていた可能性があると考えるのである<sup>46</sup>。

### (c) 平野コレクションのバクトリア語銘文貨幣

古銭の収集家であると同時に古銭学者でもある平野伸二氏所蔵の貨幣には、タシケントの近くの Kanka 遺跡で発見されたとされる、バクトリア語の銘文のある銅貨がある：図 29。支配者の左横向きのプロフィールとその左わきにバクトリア語の銘文がある。もう一方の面は平滑である。銘文はよく残っており比較的容易に  $\kappa\alpha\nu\alpha\omicron$  と読むことができる。書体面で注目されるのは文字  $\upsilon$  で、基準線より上のストロークは、上ではなく右方向に開いた半円ないしは円弧になっている。Sims-Williams の書体の研究によれば、この特徴 ( $\upsilon$ 2) は 465 年以降の文書に見られるという (Sims-Williams and de Blois 2018: 51)。要するにエフタル期以降の字形である。この時代のバクトリア文字では、語末の  $-\alpha\omicron$  はトルコ語の語末の開音節  $-a/\ddot{a}$  の表記に用いられる。例えばトルコ語の *bilgä* は  $\beta\iota\lambda\gamma\alpha\omicron$ 、*toḡa* は  $\tau\omicron\gamma\gamma\alpha\omicron$ 、また漢字で「僕羅」と音写される人名は  $\beta\omicron\kappa\omicron\lambda\alpha\omicron$  と表記されている (Sims-

<sup>41</sup> この形式上の問題は電子メールでの意見交換の中で、Sims-Williams 教授が指摘された。

<sup>42</sup> ソグド語とウイグル語に独立して起こったこの発音の変化については Yoshida (2008: 344-50) を参照せよ。

<sup>43</sup>  $\sigma\alpha\beta\alpha\tau\omicron$  の 2 番目の  $-\alpha$  は所謂 svarabhakti 母音ということになる。svarabhakti 母音が  $-\alpha$  で表される例は Sims-Williams and Lee (2003: 171) を参照せよ。なお  $\sigma\alpha\beta\alpha\tau\omicron$  は、梵語の \*sa-vāta- 「風 (=息?) 持てる > 生き物」のような語も想定させるが、そのような語は在証されないようだ。

<sup>44</sup> Sims-Williams and de Blois (2018: 79) は za の文書の年代を「466?」としている。

<sup>45</sup> 卑近な例だが、日本語では、同じ英語の American に由来する語が、「メリケン」とも「アメリカン」とも発音される。英語受容の時代差や接触の程度を反映して、借用形の発音に変化が見られる。実際言語接触ではよく見られる現象である。

<sup>46</sup>  $\phi\omicron\omicron\omicron\omicron\kappa\eta\sigma\alpha\omicron\omicron$  は、後にチベットで Phrom Kesar として伝説化するというが (稲葉 2010: 155-54)、仏教側がイスラムの攻撃を退けたという、仏教を守護する英雄的側面がそのことの一因であったのかもしれない。

Williams 2010: 152-53, 78, 83)。従ってこの王の名前は、母音の長短は分からないが、[kana]と発音したらしい<sup>47</sup>。このことと関連して注目されるのは、ソグド文字で k'n' と読むことができるカウンターマークの存在である (Göbl 1967, Bd. 4: Tafel 9, no. 83)。綴り字から想定される発音は καναυο と同じである。このカウンターマークはペーローズ王の銀貨に追刻されている。

図 29 : καναυο の貨幣



ここではこのカウンターマークが追刻された、平野伸二所蔵のペーローズ銀貨と Alram (2016: 101) に掲載された銀貨を示す：図 30, 図 31。これらの貨幣の表面には複数のカウンターマークが追刻されている。平野氏所蔵の貨幣では 4 個のカウンターマークが以下のような配置で追刻されている：1h x'γ'n βγγ; 4h δšcy βγγ; **6h k'n'**; 10h tkyn. Alram (2016: 101) では以下のような配置で追刻されている：3h pyškw; **6h k'n'**; 9h δšcy βγγ.

図 30 : カウンターマーク k'n'



(平野コレクション)

図 31 : カウンターマーク k'n'



(Alram 2016: 101)

Sims-Williams (2009, 2012c) はバクトリア語の銘文を持つ銅貨に βηστοο という王名を解読し、同じ名前を記したカウンターマークをアラブササン式銀貨およびホスロー2世の銀

<sup>47</sup> καναυο 自体は在証されないが、バクトリア語文献で知られている人名の καναγο のバリエーション形 (実際には語末の母音に後続する [g] が弱化した形式) かもしれない。Sims-Williams (2010: 75) によれば、この人名はソグド文字で k'n'kk, k'nk と表記される人名と同じであるという。語末の -Vg が -vo に変化する事例はよく知られている (Sims-Williams 2020-2021: 71)。ただこの場合は後に示すように、対応するソグド文字表記の形式は k'n' であるようなので、たまたま発音が同じで、来源が異なる人名ではないかと思う。

貨に発見した（参考図3）。そして Guzman の3州あるうちの一つの州の王である βησοτο は独自の銀貨を発行できなかったために、自分のカウンターマークを追刻した銀貨を流通させていたと指摘した。このように、独自の銀貨を発行できない、あるいは発行しない場合に、既存の銀貨にカウンターマークを追刻する事例は、ササン式の銀貨が流通した中央アジアには広汎に見られた。ただ、それらのカウンターマークを特定の支配者に特定することはほとんど出来ていないのが実情であるという（Vondrovec 2014: 425）。βησοτο のカウンターマークの場合は極めて珍しい事例であると言える。平野コレクションの καναυο の銘文のある貨幣の発行者は、独自の銅貨を発行すると同時に、ペーローズの銀貨にソグド文字で k'n' と表記したカウンターマークを追刻していたようだ。その場合、なぜ βησοτο の場合と異なり、バクトリア語の銘文をカウンターマークにしなかったのか、その理由は判然としない。しかし、ソグドの商業圏は周辺のコレズム語圏やバクトリア語圏にも及んでいたので、そのことを念頭に置いていたのかもしれない。

καναυο が支配した領域がどこであったかは興味深い問題だが、これもバクトリア語圏であったらしいという推測ができるだけである。ソグド語圏であった Kanka で出土したという情報が正しかったとしても、1点ないし少数しか見つかっていないのであればあまり参考にできない。従ってこれ以上の議論はできないわけだが、ここでは敢えて筆者の「思いつき」を記しておきたい。[kana]という発音の名前を持つ支配者としては、639年に死んだ西突厥の沙鉢羅咥利失可汗の弟で、640年に即位した乙毘沙鉢羅葉護可汗の父親である伽那設が知られている（内藤 1988: 195-97）。「設」は šad という称号を表し、突厥の可汗の子弟が帯びていた。西突厥の可汗の一族が、バクトリア語圏の国の支配者になっていた例としては、活国（Kunduz）の王になっていた咄度設が知られている。彼は統葉護可汗（位 618?-628）の長男であった。バクトリア語圏ではないが、サマルカンドには西突厥の可汗に即位する前の肆葉護可汗（咥力特勒）がいた。彼もまた統葉護可汗の息子であった。そして内藤(1988: 219-26)によれば、638年に即位した乙毘咄陸可汗は咄度設の先妻の息子で、やはり吐火羅出身であったという。

このように西突厥の可汗家に属する伽那設が、バクトリア語圏のどこかの国で支配者であった可能性はある。実際現在のドシャンベ付近の Shuman には、玄奘の時代、奚素突厥というトルコ系の民族が支配民族になっていた（吉田 2018: 173-74）。伽那設がそのような支配者になっていたとすれば、彼が支配する地域で発行した銅貨が、平野コレクションのこの貨幣であったとみなすことができるかもしれない。もとよりこれは単なる「思いつき」以上のものではなく、推測の上に推測を積んだ憶測に過ぎないが、支配者の名前の発音が同じであることと、その支配年がカウンターマークを追刻する時代として矛盾がないので、一つの可能性として提案しておくことにした。

ところでこの伽那設は莫賀設の息子であったが、莫賀設自身は統葉護可汗に隷属する阿史那一族であった（内藤 1988: 221-22）。興味深いことに、肆葉護可汗死後、西突厥の混乱時代に乙毘咄陸可汗と対立しながら、唐の支援を受けて可汗を排出したのはこの莫賀設

の一族であった。この背景には武徳（618-626）年間に、莫賀設が人質として唐に送られていたときに、即位前の太宗と義兄弟になったことがあったのだろう（内藤 1988: 221-22）。この早い時期の西突厥と唐との関係の実情は不明だが、630年の春の段階で玄奘が碎葉で目撃した「漢使」は、この西突厥と唐の外交関係の存在を示すのであろう<sup>48</sup>。

ところで上で見た平野氏所蔵のペーローズ銀貨のカウンターマークには、x'γ'n βγγ「可汗なる神（＝神なる可汗？）」という銘文を読み取ることができる。この可汗は西突厥の可汗の可能性が高いと考えられる。上で見た tkyn と読むことができるカウンターマークも、西突厥に連なる支配者たちのものであろう。このことと関連してやはり平野氏が所蔵するペーローズ銀貨には、突騎施のタムガを追刻したのが見られる：図 32<sup>49</sup>。突騎施は西突厥の十姓の一つで、7世紀の終わりから8世紀の前半にかけて、西突厥滅亡後の後継者として絶大な勢力を持っていた。突騎施の銘文を持つ方孔銭は数多く出土している。突騎施もまた銀貨としては、カウンターマークを追刻したササン式銀貨を使っていたのかもしれない。

図 32：突騎施のタムガのカウンターマーク（平野コレクション）



図 33：ペンジケント出土のペーローズ銀貨と突騎施のタムガのカウンターマーク



(Lurje and Marshak 2002 より)

<sup>48</sup> 当該の部分は以下のようにある：須臾更引漢使及高昌使人。入通國書及信物。可汗自目之甚悦。（『大正大藏經』50 卷, 227b12-14）「しばらくして（可汗は）さらに漢使と高昌の使人に引見した。彼等が入ってきて、国書と贈物を奉った。可汗は親しく此を見て非常に喜び、…」（長沢訳 1985: 41）。

<sup>49</sup> 突騎施のタムガを追刻したペーローズ銀貨はペンジケントでも出土している：図 33（Lurje and Marshak 2002）。

## 5. おわりに

ファヤズテパの銘文を手始めにして、バクトリア文字の書体と関連するテーマについて筆者の見解と言うより感想に近いものを長々と書いてきた。正直なところ、バクトリア語を一から読み解く能力のない筆者は、Sims-Williams が発表したテキストと翻訳をたよりに、ただただ思いつきを綴っているに過ぎない。「学問研究は国際的でなければ意味がない」という昨今の日本の学界の趨勢となっている価値観のなかでは、筆者のこの研究の学術的な意義は乏しく、その点で批判を受けることもあろう。ただこの種の印欧語についての我々日本人の研究と称するものは、若干の例外は確かにあり心強いが、多くの場合このパターンであったように思う。その一方で、そういう「研究」も、日本人にとって馴染みの薄い分野の研究を、日本人が咀嚼し日本人の為に日本語で書いているという意味で、日本における研究の進展につながっていくのではないかと思っている。

### 【後記】

原稿提出後、Collège de France の F. Grenet 教授から以下の論文が送られてきた。本論考と関連するテーマを扱っているので、ここに言及しておく。ただ筆者の議論を変更すべき事項は含まれていなかった。

F. Grenet, “A historical figure at the origin of Gesar of Phrom. Frum Kesar, King of Kabul (737-745)”, in: M. T. Kapstein and Ch. Ramble (eds.), *The many faces of King Gesar. Tibetan and Central Asian studies in homage to Rolf A. Stein*, Leiden/Boston, 2022, 39-52.

## 参考文献

(欧文)

- S. Album, “An Arab-Sasanian dirham hoard from the year 72 hijri”, *Studia Iranica*, 21/2, 1992, 161-95.
- M. Alram, *Das Antlitz des Fremden*, Wien, 2016.
- M. Alram, “The numismatic legacy of the Sasanians in the East”, in: T. Daryaee, *Sasanian Iran in the context of late antiquity*, Jordan Center for Persian Studies, 2018, 5-37.
- D. Balogh (ed.), *Hunnic peoples in Central and South Asia. Sources for their origin and history*, Groningen, 2020.
- Bi Bo and N. Sims-Williams, “A Sogdian Fragment from Niya”, in: *Great journeys across the Pamir Mountains. A Festschrift in honor of Zhang Guangda on his eighty-fifth birthday* (ed. H. Chen and X. Rong), Leiden–Boston, 2018, 83-104.
- Ching Chao-jung et al. “I. Chinese sources”, in: Balogh (2020: 1-112).
- G. D. Davary, *Baktrisch: ein Wörterbuch auf Grund der Inschriften, Handschriften, Münzen und Siegelsteine*, Heidelberg, 1982.
- R. Göbl, *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen und Indien*, 4 vols., Wiesbaden, 1967.
- H. Humbach, *Baktrische Sprachdenkmäler*, 2 vols. Wiesbaden, 1966, 1967.
- Y. Kasai, “The Chinese phonetic transcriptions of Old Turkish words in the Chinese sources from 6<sup>th</sup>-9<sup>th</sup> century: Focused on the original word transcribed as Tujue 突厥”, *Studies on the Inner Asian Languages*, 29, 2014, 57-135.
- P. Lurje and B. I. Marshak, *Sogdijskie nadpisi iz raskopok drevnego Pendžikenta sezona 2001 g.*, St. Petersburg, 2002.
- M. Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*, Wiesbaden, 2007.
- G.-J. Pinault, “Concordance des manuscrits tokhariens du fonds Pelliot”, in: Malzahn (2007: 163-219).
- Ch. Reck, *Berliner Turfanfragmente buddhistischen Inhalts in soghdischer Schrift*, Stuttgart 2014.
- K. Schippmann, *Die iranischen Feuerheiligtümer*, Berlin/New York, 1971.
- N. Sims-Williams, *New light on ancient Afghanistan: the decipherment of Bactrian*, London 1997, iv + 25 pp., 4 pl. [Revised reprint in V. Hansen (ed.), *The Silk Road: Key papers. Part I: The Pre-Islamic Period, Vol. 1*, Leiden 2012, 95-114.] [日本語訳：ニコラス・シムズ＝ウイリアムズ（熊本裕訳）「古代アフガニスタンにおける新知見」『Oriente：古代オリエント博物館情報誌』1997/12, 3-17].
- N. Sims-Williams, “Two Bactrian fragments from Yar-khoto”, in: D. Durkin-Meisterernst et al. (ed.), *Turfan revisited. The first century of research into the arts and culture of the Silk Road*, Berlin, 2004, 325-32.



- N. Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan*, Vol. 2: Letters and Buddhist texts, London, 2007.
- N. Sims-Williams, “The Arab-Sasanian and Arab-Hephthalite coinage: a view from the East”, in: *Islamisation de l’Asie centrale. Processus locaux d’acculturation du VII<sup>e</sup> au XI<sup>e</sup> siècle* (Cahiers de Studia Iranica, 39, ed. É. de la Vaissière), Paris, 2008 [2009], 115-130.
- N. Sims-Williams, *Bactrian personal names* (Iranisches Personennamenbuch, II/7), Vienna, 2010.
- N. Sims-Williams, “Bactrian historical inscriptions of the Kushan period”, *The Silk Road*, 10, 2012, 76-80.
- N. Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan*, Vol. 3: Plates, London, 2012a.
- N. Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan*, Vol. 1: Legal and economic documents. Revised edition, London, 2012b.
- N. Sims-Williams, “The Bactrian era of 223 C.E. — some numismatic considerations”, in: *Sichou zhilu guguo qianbi ji silu wenhua guoji xueshu yantaohui lunwenji* 絲綢之路古國錢幣暨絲路文化國際學術研討會論文集 (Proceedings of the Symposium on Ancient Coins and the Culture of the Silk Road), ed. Shanghai Museum 上海博物館, Shanghai: Shanghai shuhua chubanshe 上海書畫出版社, 2011 [2012c], 62-74.
- N. Sims-Williams, “Some Bactrian inscriptions on silver vessels”, *BAI* 23, 2009 [2013], 191-98.
- N. Sims-Williams, “A so far unedited early Sogdian letter from Loulan (Stein collection L.M.II.ii.09)”, 余欣 (主編) 『中古中国研究』 第三卷：絲綢之路：從写本到田野專号 2020, 21-35.
- N. Sims-Williams, “The Bactrian inscription of Jaghori: A preliminary reading”, *Bulletin of the Asia Institute*, 30, 2020-2021, 67-73.
- N. Sims-Williams et al. (with Aman ur Rahman, F. Grenet), “A Hunnish Kushan-shah”, *Journal of Inner Asian Art and Archaeology*, 1, 2006, 125-131.
- N. Sims-Williams and F. de Blois, *Studies in the chronology of the Bactrian documents from Northern Afghanistan*, Vienna, 2018.
- N. Sims-Williams and J. Lee, “The antiquities and inscription of Tang-i Safedak”, *Silk Road Art and Archaeology*, 9, 2003, 159-184.
- N. Sims-Williams and E. Tucker, “Avestan *huuōišta-* and its cognates”, G. K. Schweiger (ed.), *Indogermanica. Festschrift Gert Klingenschmitt. Indische, iranische und indogermanische Studien dem verehrten Jubilar dargebracht zu seinem fünfundsechzigsten Geburtstag* (Studien zur Iranistik und Indogermanistik, Bd. 3), Taimering, 2005 [2006], 587-604.
- K. Vondrovec, *Coinage of the Iranian Huns and their successors from Bactria to Gandhara (4<sup>th</sup> to 8<sup>th</sup> century CE)*, 2 vols., Vienna 2014,
- Y. Yoshida [Review], N. Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan 1*. *Bulletin of the Asia Institute*, 14 2000 [2003], 154-159.

- Y. Yoshida, “Die buddhistischen sogdischen Texte in der Berliner Turfansammlung und die Herkunft des buddhistischen sogdischen Wortes für *Bodhisattva*.” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 61-3, 2008, 325-358. (Übersetzt von Y. Kasai in Zusammenarbeit mit Ch. Reck.
- Y. Yoshida, “The Sogdian Merchant Network” in: *Oxford Research Encyclopedia of Asian History*, Oxford, 2021 (online)

(日本語)

- 稲葉稔「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76, 2004, 313-382.
- 稲葉稔「8世紀前半のカーブルと中央アジア」『東洋史研究』69/1, 2010, 174-151 (逆頁).
- ヴェシエール, エチエンヌ・ドゥ・ラ・ (影山悦子訳) 『ソグド商人の歴史』東京 2019. 京都国立博物館『シルクロード 文字を辿って——ロシア探検隊収集の文物——』京都, 2009.
- 桑山正進『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都, 1990.
- 桑山正進 (編) 『慧超往五天竺国伝研究』京都, 1992.
- 桑山正進「馨孃、順達、刹利、曷擲支」『石上善應教授古稀記念論文集 仏教文化の基調と展開』東京, 2001, 131-45.
- グルネ, フランツ (吉田豊訳) 「カフィル・カラ出土の木彫パネル—サマルカンド市民 (nāf) の集合画—」『東方学』vol. 139, 2020, 70-90.
- 内記理「年代判定の一指標としてのカローシュティエー文字の形態」『西南アジア研究』90, 2020, 20-52.
- 内藤みどり『西突厥史の研究』東京, 1988.
- 長沢和俊 (訳・注) 『玄奘三蔵 大唐大慈恩寺三蔵法師伝』東京, 1985.
- 福島恵『東部ユーラシアのソグド人——ソグド人漢文墓誌の研究——』東京, 2017.
- 福島恵「バクトリア人羅姓墓誌の基礎的考察」『内陸アジア史研究』33, 2018, 1-25.
- 水谷真成 (訳・注) 『大唐西域記』東京, 1971.
- 宮本亮一「ワフシュ神とラームセート神——バクトリア語文書から見たトハーリスターンにおける宗教事情の一側面——」『東洋学術研究』59/2, 2020, 85-114.
- 森安孝夫「ウイグル文書割記 (その四)」『内陸アジア言語の研究』9, 1994, 63-93.
- 森安孝夫『シルクロード世界史』東京, 2020.
- 吉田豊「ソグド語雑録 (IV)」『内陸アジア言語の研究』10, 1995, 67-84, pl. 3.
- 吉田豊「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』28, 2013, 39-65.
- 吉田豊「ソグド文字の縦書きは何時始まったか」森部豊 (編) 『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』アジア遊学 175, 東京: 勉誠出版, 2014, 15-29.

吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 2018, 155-182.

(中国語)

吉田豊「古代亀茲境内現存粟特文石窟題記」(慶昭蓉訳), 榮新江主編『亀茲石窟題記 研究論文篇』上海: 中西書局, 2020, pp. 71-91.

林梅村『楼蘭尼雅出土文書』北京, 1985

林梅村「中国境内出土帶銘文的波斯和中亞銀器」『文物』1997/9, 55-65.

王銀田「北朝時期絲綢之路輸入的西方器物」張慶捷他編『4~6世紀的北中国与欧亜大陸』北京, 2006, 68-83.

参考図 1



NumH 208 平野収集

参考図 2



φορομο κησαρο の銘文 NumH247J (after Sims-Williams 2009)

参考図 3



βησοτο コイン ; 右は平野収集



XXI/10



XXIII/21

Fig. 4. Countermark of Bēsut.



Khosraw II のコインと βησοτο のカウンターマーク (Album 1992: no. 10)

付録

14860 = T II Y 58 + 14835a = T II Y 9 のテキストと翻訳

テキスト

- 1 [ ](..... xwt'w pyδ'r) 'nβ'rt'k nxšnh ZY zβγ['w'y ]
- 2 [ ](.)'m p'rZY 'YK' pwt'y 'kw mrtxmyt myδ'ny ''z'yt rt(y)[ ]
- 3 [ ](p'rZY) 'M mrtxmyty pr'w mγ'wn pδ'yšt wsn mrtxm(y)[ty pyδ'r]
- 4 [ n](xšn)h 'nβ'nty pyδ'r mw 32 znk'n nxšnh[ ]
- 5 [ ](.)yst (...) šy'tr pyδ'r mw 80 znk'n zβγ'w'y p(rw'y)rt[ ]
- 6 [ ](.)ysk wyspw pwtstβt pyδ'r 'š(t .....)[ ]
- 1/7 [ ] pr]β'yrt p'rZY xw
- 2/8 [ ](.) c'n'w 'prtmw
- 3/9 [ ]y wyrmny wyδ'y
- 4/10 [ ](β)y ''m'rδ'n
- 5/11 [ ] sprγmy pwstk
- 6/12 [ ](δ)[ ]w'n'w[ ]

訳

- 1 . . . 王の為に要約して相と好 . . .
- 2 . . . なぜなら仏陀が人間たちの間に生まれるとき . . .
- 3 . . . ではなく、人間たちと同じように現れる、人間たちのために . . .
- 4 . . . 相の原因の故に 32 種類の相 . . .
- 5 . . . より多いために 80 種類の (随形) 好を変える . . .
- 6 . . . すべての菩薩の故に 8 つの . . .
- 7 . . . 彼は説く。なぜなら
- 8 . . . 最初に . . . したとき
- 9 . . . 寂滅
- 10 . . . みんなで
- 11 . . . 華経
- 12 . . . 次のように



# 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・竹原弘展

## 1. はじめに

ウズベキスタンのファヤズテパ遺跡出土壁画の黒色顔料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

## 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料（PLD-43891）は、ファヤズテパ遺跡B区第8室の壁画断片9より採取された黒色顔料の付着した壁画断片（Sample1）である。試料は、アクリル樹脂とみられる樹脂による強化処理が行われていたため、アセトンによる溶脱処理を2ヶ月程の時間をかけて行った。また、精製して得られたCO<sub>2</sub>量が少なかったため、セメントタイト化による微量測定を行うこととした。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-43891	Sample1 ファヤズテパ遺跡 B区 第8室右壁 壁画断片9	種類：黒色顔料付着壁画断片 状態：dry 備考：樹脂強化済（アクリル樹脂か）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） セメントタイト化

調製した試料は、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

## 3. 結果

表2に、<sup>14</sup>C年代を示す。<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

表2 放射性炭素年代測定結果

測定番号	<sup>14</sup> C年代 (yrBP±1σ)
PLD-43891	9400±1000

今回の試料は、セメントタイト化がうまくいかなかったためにビーム量が確保できず、十分な測定ができなかった。ただし、誤差の大きな参考値であるものの、9400±1000<sup>14</sup>C BPの値が得られている。これは、予想されている年代よりもはるかに古く、強化に使用された樹脂が除去しきれず、影響が残っている可能性が高いと考えられる。

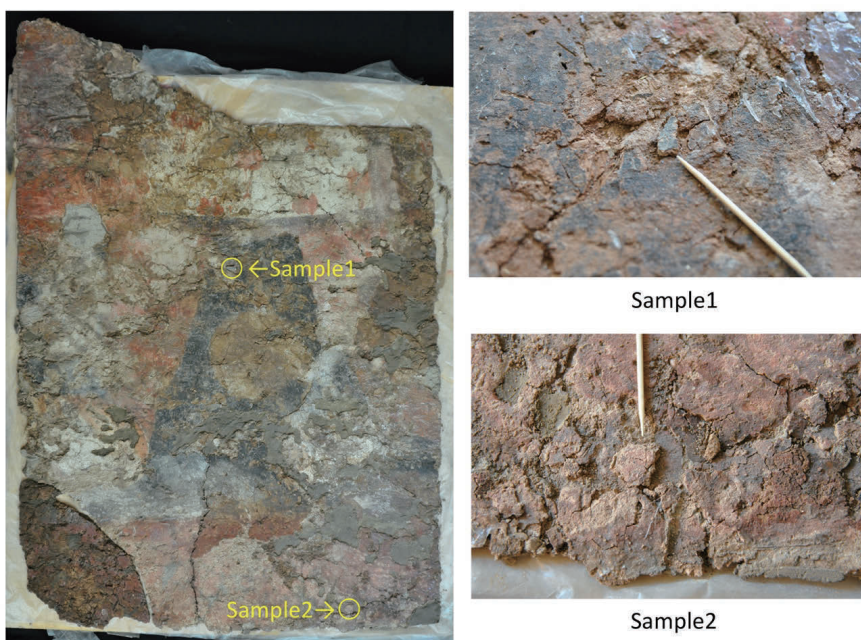


## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

## 【付記】

年代測定を依頼した資料は、2017年6月8日にウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所のM.A. レウトヴァが、ファヤズテパ遺跡B区第8室右壁（北西壁）の壁画断片9から、材質・構造調査を目的として採取した2点の壁画片のうちの1点 (Sample 1) である。材質・構造調査の結果は、田村朋美・柳成焜・M.A. レウトヴァ「ファヤズテパ遺跡出土壁画の自然科学的調査」(影山悦子・M.A. レウトヴァ・K. アブドゥルラエフ (編)『ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究』2021年, pp. 87-93) を参照されたい。(影山悦子)



B8 室右壁（北西壁）からはぎ取られた断片9（中央の人物の右側の人物）から採取

ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の保存修復と研究 2

2022年3月30日発行

著者：影山悦子、石松日奈子、吉田豊

発行：名古屋大学人文学研究科／名古屋大学高等研究院

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

印刷：株式会社あるむ

〒460-0012 名古屋市中区千代田 3-1-12 3F



ウズベキスタン南部  
フヤズテパ遺跡出土初期仏教壁画の  
保存修復と研究 2

